

原作通りにいかないけど、何とか頑張ってます。

LBW

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちよつとアホだけど頑張る人が転生したお話。

(ぶつちやけて言うと言いつォギアの世界にF a t eの『騎士は徒手にて死せず』をぶち込みたかっただけ)

目次

準備と愚者の原作前

原作通りにいかないけど、何とか頑張ってます。	1
転生しましたが、何とか生きています。(上)	6
転生しましたが、なんとか生きています(下)	10
録な戦闘経験は無いけど何とか戦います。	20
ギアっぽいの手に入れたけど、色々曖昧。	27
ライブに行こうかと思っただけど、どうしよ。	34
ライブに行ってから、碌な目に合わない。	41
上等だ、やってやるよクソツタレ。	47
取り敢えず、こいつ潰すか。	54
立ってるのもきついけど、なんとか耐えています。	64
幕間、もしくはメモリア。	72
設定、それも原作前の物。	75
流転と皇帝の無印	
原作って、何日に始まるっけ？	79
始まったけど、やっぱり来る。	89
脆く、強く。	101
例の如くギリギリだけど、何とか生きています。	108
戦うのはいいけど、なんか誤解されています。	115

準備と愚者の原作前

原作通りにいかないけど、何とか頑張ってます。

ひゅごっ、と夜の町に風が吹いた。

それに対して、ビルの屋上に佇むパーカーを羽織った少女はくあつと欠伸をする。まるで、つまらない物を見ているかのように。

「……………ん？」

その刹那、頬に何かが付いた。不審に思っ指でそれを取ると鼠色の塵がそこにあった。

塵を確認した瞬間、けたたましいサイレンが鳴った。

9時の方向か。

そう少女は呟くと、立ち上がって懐から狐面を出して被り、そしてつう、と息を吸った。

そして駆け出す。ビルの合間を飛び越え、時には窓ガラスをブチ破ってショートカットしながら進む。

そうしている内にそれを見つけた。

それは色々な見た目や形をしていて、ブドウの様な形やずんぐりしたなめくじみみたいな物まで居た。

その名は『ノイズ』

人類共通の脅威とされ、人類を脅かす認定特異災害。

その特性は触れた人間を炭素に変えてしまう事である。

それを少女は一瞥するとビルから飛び降りる。

そして叫ぶ、その心に浮かぶ歌を

「
k n i g h t _{狂気} of _よ c r a z y _永 A r o u n d i g h t _劫 t r o n _れ」

ダンツ、と道路に片膝を着いて着地している時には、もう彼女はパーカーでは無く、濃色のガントレットにレギンス、そしてバイザーが紅く煌めく仮面。そしてそれ以外にも要所要所に西洋の鎧の様な物を着ていた。

少女は、着地した状態の片膝を上げる。

すると次の瞬間、側にあつた『止まれ』の標識の根本を足払いで折った。

さらにそれを少女が拾った刹那、標識に赤い血管の様な筋が通つた。

「疾ッ！」

そしてそれを近場に居たノイズに一閃すると、丁度『止まれ』の角の部分が刺さつてそのまま真つ二つになり塵となった。

「次」

それから、後ろから迫っていた複数のノイズも一気に薙ぎ払つてから、横に8の字を描く様に標識をぶん回しながら正面を突っ切り、次々とノイズを屠っていく。

そしていきなり急ブレーキを掛けると、回れ右に180度旋回して標識を一直線にぶん投げた。

投げられた標識は次々とノイズを貫通し、やがてブロック塀に刺さつて止まった。

それから、少女は周りを見渡ししてそれをみつける。そしてノイズを蹴飛ばしながら進むと、自販機次の武器を持ち上げる。するとまた自販機に赤い筋が通った。

「ツラアア！」

それを今度は乱雑にぶん回す。それにより、ノイズも数メートル吹き飛ばされて塵と化したり叩き潰されたりされていく。

そうする事数分。あれからいくつか武器を変えながらノイズを屠っていると、後ろからエンジン音がして来た。

それを横目に見ると、装甲車からアサルトライフルを抱えた厳つい自衛官が隊列を組んで出て来て、ノイズに向けて銃を構えた。すると次の刹那、少女のうなじの部分から数本の黒いコードの様な物が生えて、それが自衛官の持っていた全てのアサルトライフル刺すと赤い筋が入った。

後ろから悲鳴やらが聞こえるが、あんまり気にせずにそのまま自衛官から銃を取り上げて一言。

「借りるぞ。」

そう言いながらコードに刺さったアサルトライフルを両手に一丁ずつ取ると、コードがはずれた。そしてストックを脇に抱え込むようにして構えた。

その姿勢でトリガーを引いて乱射すると、ノイズに蜂の巣の如き風穴が大量に空いた。そして弾倉が空になったら銃ごと捨てて、またコードに刺さったままのアサルトライフルをさつきと同じ様に取って構えると、これも同じ様に乱射。

それを数回繰り返すと、ノイズは殆ど消えていた。

そして少女は、両手で数える程に足りるノイズを屠らんと、ぐつと拳を握って駆け出したその刹那

「羽撃Imyuteus は銃amenohabakiri 風切tron」

歌が、聞こえた。美しい防人の歌だった。

一瞬だけ立ち止まった瞬間、青い髪の少女が乗るバイクが横を通り過ぎて行き、手に持った刀で次々とノイズは屠っていく。

それに対して少女はと言うと。

「うっわ、また来たのかよ………」

と、面倒くさそうに仮面の奥で眉を潜めた。

何故なら、少なくとも少女の中ではあの青髪の少女はロクでも無い存在だからだ。

そして少女は、青髪の少女が戦ってる間におさらばしようと路地裏

に駆け込んだ。

「翼、例の装者はいたか？」

「いえ、逃げられてしまいました。」

厳つい声に、翼と呼ばれた青髪の少女は周りを見渡しながら答える。

その足元には先程斬り伏せたノイズの塵と、赤い筋が通った鉄パイプが落ちていた。

それを慎重に拾い上げると、カツ、とコンクリートと鉄パイプが擦れる音がした。それから、鉄パイプの赤い筋を眺めていると、赤い筋が透明になって消えていった。

それを見て、彼女は無意識に力んでいた。それも唇から血が出るほどの力で。

やがて彼女は独り言を零した。

「何故、あの時来てくれなかつたんだ…… 『アンノウン』……！」

日本の都市にとある一つの都市伝説が存在する。

曰く、それは黒い霧を纏った騎士だとか。

曰く、ノイズから助けてくれるとか。

曰く、人では無いとか。

曰く、曰く、曰く。

と、まあ様々な噂がある訳だが

「やっべ、宿題まだ出来てねえ！あーもう、下手にノイズに突っ込むじゃ無かったあ！」

これは案外アホかもしれない人のお話。

転生しましたけど、何とか生きています。(上)

日本の都市にとある一つの都市伝説が存在する。

曰く、それは黒い霧を纏った騎士だとか。

曰く、ノイズから助けてくれるとか。

曰く、人では無いとか。

曰く、曰く、曰く。

と、まあ様々な噂がある訳だが

「ホーント、世の中クソだなあ。」

まあその実がこんな前世持ちの腹黒クソ女だとは思いはしないだろう。

ここだけの話、自分は転生者らしい。

『らしい』というのは自分の前世の事が曖昧だからだ。いや、別に覚えて無いとかじゃなくて『なーんかこんな事あったなあ』なんてぐらいしか無い。

んで、何で転生したか分かったかと言うとだ。ある日目覚めると、アパートの部屋で5歳ぐらいのメスガキになっていた。何を言ってるのか分からねーと思うが（ry

因みに前世は男だったと思う。多分。

そこから色々調べてみるとこの子の名前は『方波見^{かたばみ} 沙樹^{さき}』という名前らしい。

この方波見家の家族構成は、母と父、そして幼い弟がいる。両親は愛情たっぷり育ててくれて、弟は舌足らずな口調で『ねー』と呼んで後ろをついて来て本当に可愛い。この時は本当に幸せだった。

でも、そんな幸せもすぐに壊れた。

幸せな日が少し続いたと思ったらある日、変な男達が家に押し掛けて来て、銃を取り出して両親を撃ち殺した。

そして、男達の手がこっちに伸ばされて

そっからの事はあんまり覚えていない。

分かる事は気が付けば真っ白な病室で目覚めた事ぐらい。その時に『知らない天井だ』と自然に呟いていた。某新世紀のシンジ君もこんな感じだったのだろうか？

置かれた状況がよく分からずに困惑していると、見回りに来たであろう看護師さんが俺を見た途端に慌てて出て行った。それから少ししてから小走りで来た医者のおっさんに色々と説明された。

……え、何？俺って行方不明扱いだったの？

それから、あの意識が途切れたあの日から周りが目まぐるしく動いた。

というか情報の量に頭がキャパオーバーしそうだった。情報を整理すると

曰く、4年間も行方不明だったとか。

曰く、俺の家族は遺体で見つかったとか。

曰く、見つかった時は死に体だったとか。

これらだけでも頭がついていかない。というか母さん達死んだのか……まあ悲しいといえば悲しい、しかしだ。

一番ショックだったというか、焦った事がある。

何とこの世界、『戦姫絶唱シンフォギア』の世界らしい。

.....
いや、なんでやねん。

だってあれはおかしい。将さんは素手で熊を殴り倒すし、梅子さんは頭にコンピューター入れてんのかってレベルで情報処理能力がとんでもない。

一回だけ、なんでそんな事が出来るのか聞いた事があつたがこう言われた。

「OTONAだからだ！」

『やっぱおかしいよお前ら』と、俺は考えるのをやめた。

俺がああOTONA達に思考停止してから数ヶ月後。
俺は見た事無いシンフォギアを纏っていた。

.....
どうしてこうなった!??

転生しましたが、なんとか生きています（下）

あのOTONA達に思考放棄してから数週間。

俺は近くの小学校に転校し、そこで授業の一環として森林のゴミ拾いのボランティアに来ていた。

学校の先生曰く、軽いピクニックみたいな物だと言っていた。それと親交を深めろとも言っていたので、それを梅子さんに伝えると当日に特製の弁当を貰った。すげーいい匂いがする。何が入っているのだろうか………？

そして翌日、広場にて。

本来なら、そこで適当にゴミを拾ってほつつき歩いていれば良かったんだが、何と教師が「じゃあ二人一組でペア作って」と言い始めた。……… やつべ、何か涙が出てきた。

多分、分かる人には分かるであろうこの辛さ。周りを見渡せば、仲のいい男子や女子同士でニッコニコの笑顔でペアを組んでいた。

その中でも、ちらほらと男女のペアもいた……… なんだが、それはいい。オイそこ。顔を真っ赤にしながら手を繋ぐな。ほら初々しそうに微笑むんじゃねえよ。何？お前等デキてんの？

因みにこれは憶測だが、自分は案外近寄り難い雰囲気があるのかもしれない。だってほら、俺の周りには誰一人寄り付かない。というか半径1メートル以内には常に人が居ない……… 待って、俺って何かやらかしたかなあ………？

それから数分後。

同じく余り者の男子こと、「竹井^{たけい} 泰永^{やすなが}」くんとゴミ拾いする事になりました。わーいパチパチ、じゃねえよ。

何だあれ、完全に虐められっ子押し付けられたんだが。というか教師も見つて見ぬ振りしてんじゃねえよ。虐められっ子が目の前で殴られてんのに、何も注意しない先生とか初めて見たんだが。

因みに泰永君自体は結構大人しく、顔もまあまあ美少年だと思いが、いつもおどおどしてるから何となく小動物の様な雰囲気がある人

だ。

まあそこでなんやかんやありつつも、泰永君と一緒にゴミ拾いに行く事に。

行く前に先生からゴミ袋と火ばさみを受け取って、適当にそこら辺をぶらつきながらゴミを拾って行く。ゴミは意外と多く、コーヒーの缶から何かよく分かんないガラス片までと種類は様々だ。

因みに泰永君は黙々と俺の後ろを歩きながらゴミを拾ってる。

正直な所、泰永君とはこのまま話さないで黙々とゴミ拾いをしていてもいいのだが、それだと何か気まずい。かと言って虐められっ子にズカズカと喋るのもなあ……………何か自分が虐めっ子達に標的にされそうで怖いな……………。

いや、自分でも割と最低な事考えてるのは自覚してる。だが、唯でさえモブに厳しいシンフォギアの世界で、自分から虐めっ子に話し掛けるのも何かしらのフラグが立ちそうで怖い。

そうやって悶々と考えてると、泰永君が服の裾を引っ張って来た。

俺は、頭にクエスチョンマークを浮かべながら振り向くと彼が心配そうな目でこつちを見て、口を開いた。

「あの……………」

「ん？何だい？」

「君の、名前って何だっけ？」

「私の名前？『方波見 沙樹』だが。それがどうかしたのか？」

「少し、君の事が気になって。何とか皆が近寄り難そうにしてたけど、僕は話した事無かったから、どんな人なのか気になって。それに、出来れば仲良くしたくて。」

…………… oh、何という事だ。虐められっ子だからってちよつと性格的にもおかしい奴なんじゃないかとも思ったが…………… もしかしなくともこの子はかなりいい子なんじゃ無いか？

いやもう何かあれだ。さっきまで損得勘定で考えてた自分が恥ずかしいね。

よし、仲良くする為にもここはあの自己紹介でいこうか。

俺は泰永君に向き合う。そして胸を張って、口角を上げて思いっきり息を吸って叫んだ。

「私の名前は方波見沙樹ッ！誕生日は4月7日ッ！血液型はA B型で、身長は145cm！体重は……あー……… 忘れたッ！趣味は居眠り！好きな物は本と音楽！彼氏は勿論居ない！」

「……………」

…………… やつべ、何か選択肢を間違えたみたいなんだが。ほらもう泰永君も俯いちゃったし。

やっぱり原作主人公を真似て見たんだがリアルだところも上手くないとは

「ふふっ」

「え？」

「ふふっ、はははっ」

「え、ちよ」

「ふふっ、はははっ、あはははっ！」

「おい、どうかしたのか？」

「あはははっ、いや、沙樹さんってこんなに、ふふっ、面白い人だったんだなって思ってたさ。」

「そ、そうか？」

「そうだよ！さつきも言ったようにさ、皆が近寄り難そうにしてたから僕も何処か気難しい人なのかなって思ってたけど、全然いい人じゃん！」

お、おう。何というかよく喋るなお前、と言う言葉を何とか呑み込むと、改めて泰永君を見る。

さつきまでの暗い雰囲気は何処へやら。目にはハイライトが灯り、にぱーと眩しい笑顔がそこにあった。

……………ん”っ”、ま”ふ”し”い”。

おっと、危うく泰永君の純粋な笑顔に浄化され掛けた。顔に出てないといいが。とうにかさつきと全く別人だな泰永君。

そして、気付けば沙樹の口から自然と謙遜が出ていた。

「いやいや、泰永君。私はそこまで優れた人間じゃない。何なら私だって差別やら意地悪な事だつてするさ。まあぶっちゃけて言うとき、君を虐めてる人と同類さ。」

俺がそう言うのと、泰永君は一瞬だけ目を丸くしたが次の瞬間にはさっきの様な調子に戻っており、両腕を胸の前に持ってきて声を上げた。

「いや、それでも僕とこうやって話してくれてるだけでも嬉しいんだ！沙樹に比べて、他の奴らは意地悪な事しかして来ないからね。特にあの虎雄とらおとかつて奴とか。」

「は、ははは、そうなんだ。」

おお、いきなり虐めについてぶつ込んで来るとは。というか笑顔でそんな事言わないでくれ。俺ちよつと引いたぞ。てか下手すれば俺の顔引きつってるかも知れない。

そんな考えを頭の隅に追いやると、まだあれをやってなかったと思いい、俺は右手を差し出した。ほら、自己紹介で原作主人公の真似したなら手を繋ぐまでがセットだからね。

俺が右手を差し出したのを見て、泰永君が首を傾げた。

「これは？」

「ほら、あれだよアレ。万国共通の挨拶って奴。」

すると、泰永君の笑顔がもつと輝かしくなった。そして嬉々として俺の右手を握った。

「よろしく！沙樹さん！」

「ああ、宜しく、泰永君。」

それから二人で談笑しながらゴミを拾い続けた。

因みに、その途中で食った梅子さん特製弁当はめっちゃ美味かった。後、中身はのり弁当だった。

その人はまるで、僕にとっては救世主のような人だった。

その人の名前は『方波見 沙樹』。

黒に近い茶髪、少し鋭い目。そして何より元気で活発な人だ。

僕と沙樹さんはまるで正反対だった。

僕は活発でもないし、基本的におどおどしてるような性格だったからか、『弱そう』という理由だけで殴られたり蹴られたりetc.....。

まあ兎も角、そんなのが日常茶飯事だった所に一人の転校生がやって来た。

それが沙樹さんだった。

最初に見た時、僕は何というか『不思議』という印象を持った。

彼女は、特に何もしている訳でも無いのに近寄り難い雰囲気を持っており、彼女自身は何もしていなくとも何かと遠ざけられている所がある。

授業はいつも机に突っ伏して寝ていて、祿に聞いてない筈なのに昨日の小テストでは満点を取っていた。それでも彼女は喜ぶでも無く、テストを一瞥するとまた突っ伏した。

(何だろう、自由な人だな。)

居眠りする彼女を他所に、今日も僕は虐めつ子あのクズ共に学校裏へと連行された。

それから数日。

森のゴミ掃除のボランティアにて、沙樹さんとペアになった。

.....正直に言うと、彼女も虐めつ子あのクズ共と同類だと思っ

てたが全く違った。

なんと彼女、僕が話し掛けても嫌な顔一つせず自分の自己紹介をしてくれた。いや、本来それが普通なんだろうけど。

それに結構面白い人でもあった。あそこまで堂々として、それでいて独特な自己紹介は見た事が無かった。それに何より僕に握手を求めてくれたのが嬉しかった。

握手してから少し経った頃。

僕と沙樹さんは談笑しながらゴミ拾いをし続けていた。

「へえ、沙樹さんって今は親戚の家にいるんだ。」

「まあちよつと訳ありだね。でも将さんも梅子さんも優しくてさ、さつき食べた弁当だって梅子さんが作ってくれた物なんだ。」

「確かに美味しそうな匂いがしてたもんね。やっぱり親戚の人も沙樹さんの事を大事にしてくれてるんだね。」

「ああ、本当に引き取ってくれた親戚には感謝してもしきれないぐらいだ……と、そろそろいいかな？」

沙樹さんがそう言いながら足元を見下ろすと、そこにはパンパンに詰まったゴミ袋が置かれていた。

僕が様々な角度でゴミ袋を見ると、ぎゅうぎゅうに詰まった錆びたネジや灰色のプラスチック片が一つの地層の様にも見えた。

暫くそうしていると、「ほれ」と沙樹さんが軽く肩を叩いた。

「そろそろ行くよ、集合の時間まであと20分だ。」

「あ、うん！」

意外と重いゴミ袋を持って広場まで歩こうとした瞬間。

それは現れた。

「ッ!!?」

沙樹さんはそれを見た瞬間僕の襟首を掴んで半ば引きずる様に木の後ろに隠れた。

「っは、なにす「喋るな」むぐっ!!?」

突然引つ張られた事に抗議の声を上げようとすると、沙樹さんは片手で僕の口を塞ぎ、もう片方の手で持ってたゴミ袋を置いて人差し指を口に当てた。

それから、沙樹さんはまたそつと木の陰から覗くと片手で僕の口を塞いだまま僕にも見せる様に肩に寄せた。

そこには、オレンジ色の着ぐるみのような形の生命体と、黄色のず

んぐりしたなめくじの様な物が居た。

「今の、見たか。」

唐突に沙樹さんが尋ねる。

口を塞がれてる僕はコクコクと頷くと、沙樹さんは思い出した様に手を離して謝罪を口にした。

「いきなり引つ張つてすまん、だがそうでもしなきゃお前の命が危なかった。」

「い、命？」

「ああ、あれは認定特異災害の『ノイズ』触れれば体が塵と化す。」

それを聞いた瞬間、僕は口をあぐりと開けて大きな声を上げていた。

「塵!?!？」

「バカ! 声が大きいい。だがこのまま気づかれずに逃げれば何とかなる。なるべく静かに歩けば『バキツ』は?。」

木の割れる音と共に沙樹さんの重低音が聞こえた。どうやら沙樹さんが木の枝を踏んでしまった様だ。

そして二人で、もう一度木の陰からノイズのいた所を覗いてみるとそこには

ノイズがこつちをガン見していた。

「走れ!!?。」

沙樹さんが声を荒げると同時に僕は沙樹さんと二人で全速力で走りはじめた。

僕達が走り始めたのが合図だったのか、ノイズもこつちに向かって走ったり這いずって来たりと様々な追いかけ方をして来た。

そんな中、二人でほぼ叫ぶのと同じぐらいの声で喋る。

「ちっ、私の不手際とはいえ厄介だなこいつら……!。」

「ねえ、何か攻撃手段とかは無いの!?!?。」

「殆ど無いと言っつていい! ノイズ特有の障壁、その名は『位相差障壁』! 次元の違いを操つて自分が『現世に存在する比率』を変えてこつち

の干渉を無効化、もしくは弱くする事が出来るんだ！」

「つまり!?!?」

「詰み!王手!!チェックメイト!!!」

「駄目じゃん!?!?」

「ホントね!勘弁して欲しいけど..... つあつぶね!!?今頬スレスレだった!!?..... あ、そういえば!道ってこれどうなってるの!?!?」

「え、僕分かんないよ!?!?真っ直ぐ進んでるだけだからね!!?」

「ファツ!?!?じ、じゃあこれって.....」

そこまで言い掛けた時、目の前が森が開けた。そしてその先には、崖が広がっていた。更に、その崖は目測で大体数十メートルはありそうな程高かった。

そして、もうにがさんと言わんばかりにジリジリと距離を詰めてくるノイズがそこに居た。

「ど、どうしよう沙樹さん.....」

僕がそう言いながら横を見ると、沙樹さんは笑っていた。静かに、口角を上げて、されども何かを決心した様なそんな顔をしていた。

やがて、彼女は口を開く。

「なあ、泰永。」

「ひやつ、はい!?!?」

いきなり名前を呼ばれた事で少し変な声が出たが、沙樹さんはそれを気にも留めず口角を上げたままだった。

「あー、何だ。奇跡って信じる?」

「え?」

「奇跡だよ、奇跡。ほら、何かすげー幸運な事とかさ。そういうの。」

「えっと..... じゃあ、信じる。」

「おっけー、じゃあそれに身を任せましょうかね。」

そう言ったが直後、沙樹さんは僕の手首を掴むと駆け出して

宙を飛んだ。

「うわああああああ!!!」

気持ち悪い浮遊感に思わず叫んでしまう。どんどん地面との距離が短くなって来ているのに、目が離せない。目を瞑りたいの瞑れない。そんな恐怖の中。

歌が聞こえた。

「knight of」

美しくも哀しく。

「crazy Aroundight」

強くも脆い。

「tron」

湖の騎士の歌だった。

気が付けば、僕は膝裏と背中に手を回され抱きかかえられている所謂、『お姫様抱っこ』をされていた。

そして彼女と僕は何の衝撃も無く地面に着地していた。

「う、ああ?」

またもや、腑抜けた声が出てしまう。そんな僕を覗き込んでいたのは紅に光るバイザーが特徴的な軽甲冑の少女だった。

「沙樹、さん?」

彼女の名前を呼び、この特異な現状を見ると、僕達を追って来たであろうノイズがやって来たが、それでも彼女は僕を抱えたまま動かない。

そしてノイズが、僕達に接触しそうになった刹那

革のしなる様な音と共に幾本もの黒いコードが彼女のうなじから生え、ノイズを一掃した。

まるでコードが生き物の様に貫き、打ち、果ては締め切る。

そして、抱きかかえていた僕をゆっくりと下すと彼女は立ち上がり、笑う、否、嗤った。

「ホント、ついてねえよなあ俺。まあでも、そっちが悪いんだからなあ、自業自得だぜエ？ノイズ共。」

「取り敢えず、死ねや」

今、狂気を孕んだ騎士の蹂躞劇が始まる。

録な戦闘経験は無いけど何とか戦います。

情景が浮かぶ。

騎士が毀傷する事の無い剣を振るう姿を。

感覚が繋がる。

騎士が、無双する姿を。

身体に何かが巡る。

その騎士は、栄光の為で無く。

そして、声が響く。

『心象固定、完了。』

外殻装着、完了。

髄液浸透率、20%

Wake《Arroundight》

では、貴方に湖の乙女の加護があらん事を。』

少しずつ、意識が浮上する。

少しだけだが、頭と目蓋が重い。まるでうたた寝から目覚めたら様な感覚。

………此処は？

とうかさつき、ノイズに追われて、それで崖から飛び降りて

そこまで考えてから、バツと目蓋を開く。

すると開けた視界に飛び込んで来たのは、だらつしなく惚けた顔の泰永君だった。そして、何故か俺は泰永君をお姫様抱っこしていた。

「う、ああ？」

何か泰永君が変な声を漏らした時、上から追いつけて来たであろうノイズがやって来た。

「チツ」

自分だけに聞こえる様に舌打ちをした刹那、うなじから幾本のコードの様ナニカが飛び出る。

そして次の瞬間、コードがノイズを貫いた。それからは、すぐに感覚で分かった。『これはノイズを殺せる』と。

泰永君の顔を眺めながらコードを縦横無尽に動かす。すると、面白い程ノイズが霧散していく。

暫くそうしていると、やがてノイズが俺の周りに近づかなくなつた。

そういえばノイズに学習能力ってあったっけかなあ。ちよつと気になる。なーんて頭で考えながら泰永君をそつと地面に置いた。

そこで自分の姿を確認してみると、そこには肘と膝から先が濃色の鎧で覆われており、胴体はやっぱり黒のピツチリとしたインナーがあった。

そしてゆっくり立ち上がり、ノイズに向かって歩き出す。一歩、また一歩と草が生茂る地面に足を踏み込んでいく。

ある程度ノイズに近づき、首を左斜め後ろに傾けるとバキボキと音が鳴り、まだクリアにならなかつた思考が纏まってきた。

そういえば本当に厳しいわこの世界。流石『モブ厳』と呼ばれるだけある。だが、転生つばいのをしてからすぐに意識不明。更にそれか

ら目覚めて意識的に約一ヶ月。この力が発現して無かったら死んでたな……。まあ、こんな状況だ。少しくらい愚痴を零したつていいよね？

そして、そのまま首を左斜め後ろにしてノイズを見下す様に見える。そしてつう、と息を吸って言葉を零す。

「ホント、ついてねえよなあ俺。まあでも、そっちが悪いんだからなあ、自業自得だぜエ？ノイズ共。まあ、何だ。」

「取り敢えず、死ねや」

戦闘、開始。

w a v e l

幻聴か、そんな無機質な声が頭に響く。

そしてそれと同時に真っ直ぐに駆け出し、近くに居たノイズに拳を叩き込む。

するとノイズは面白い程に吹き飛び、木の幹に叩きつけられ霧散した。

続けざまに人型のノイズに肉薄して、脚を真上に勢いよく約180°に開脚して頭を蹴飛ばすと、別の方向から飛び掛かって来たナメクジの様なノイズに角度調整してから、まだ上げたままだった脚を振り下ろした。俗に言う『踵落とし』という奴だ。

踵で潰されたナメクジノイズは塵となって霧散。そしてそれを見た人型のノイズが仇とばかりに突っ込んでくる。しかしそれも

「(まあ、無駄になるんだけどね。)」

人型のノイズとの距離が約1mまで縮まると、ノイズは刺の付いた板の様な手を押し付けようと伸ばすが、それを左ストレートで粉碎すると右足を一步踏み込んで貫手。そして次の瞬間人型ノイズは霧散

した。

そしてまだ奥に居るノイズに向かって駆け出した。

w a v e 2

また幻聴が聞こえた。

しかしそれを無視して、そこら辺に落ちていた木の棒を拾うと赤い線が握った部分を中心に広がる。

そして木の棒をノイズに向けてそのまま一閃。

するとノイズの上半身が宙を舞い、木の棒は赤い軌道を描いていた。それから、近づいて来たクラゲ型ノイズの触手による叩きつけをサイドステップで回避し、真上から木の棒で叩き斬った。

しかし木の棒に限界が来たのか、中途半端にクラゲ型ノイズに刺さったまま半分に折れてしまった。

その事に一瞬気を取られた瞬間、ノイズの触手に突かれて数m吹っ飛び木に激突した。

それからすぐさま起き上がり、舌打ちしながらクラゲ型ノイズに肉薄した。

するとまた触手で突こうとしてくるが、それを両手で掴み取って一本背負いの要領で地面に叩きつけると、傘の部位を踏みつけ、思いっきり引っこ抜いた。

メリメリと嫌な音と共に太めの触手が根本から千切れる。その事に少し眉を寄せるがあまり気にしない。

そして今度は根本の部分に手を突っ込み掻き回す。そしてそれを掴むと、思いつきり手を引いた。すると、クラゲ型ノイズは霧散した。引いた手には、木の棒とこびりついた塵があつたがあまり気にせず、後ろから来ていた人型のノイズに中途半端に刺すと、刺さった部分に右ストレートをかました。

「(粗方片付いたかな。)」

周りを見渡すと、塵の山しか残っておらずノイズの姿はもう見えな
い。そして塵の山から背を向けた途端、向こう側から何かがやって来

た。泰永かと思いい声を掛けようとしたところで、異変に気づいた。

「お、泰永　　は？」

そこに居たのは泰永、ではなく全く別のナニカ。人でもなければノイズでもない。真つ黒な甲冑だった。

全長2メートル以上の真つ黒な甲冑、黒い巨大な大剣に、黒い盾、とにかく全身が真つ黒な騎士だった。

そしてなによりも、その大剣に真つ赤な血が付着していた。

そこから考え出される最悪の事態。もう既に沙樹の手は震えていた。

final wave

「オイオイ、嘘だろ……………!!?」

その瞬間、黒い騎士は驚異的はスピードでこちらに走って来た。しかし、沙樹はこの一瞬、恐怖のせいか反応に遅れてしまった。それでも、何とか両手を目の前に持ってきて交差させる。

眼前に迫る剣先。そして、遅れてやってくる衝撃。手甲で受け止めた筈が十数メートル吹っ飛ばされて、木に激突した。

「ガッ……………。何だアイツ、あんなの原作にいたか!!?」

そう。あれは原作に居ない。少なくとも沙樹にはその確信があった。

それでも、なんとか立ち上がり騎士に肉薄すると、拳を顔面に叩きつける。そしてそのまま、2発、3発と次々に叩きつける。しかし、鎧にかすり傷がつくだけでまともに効いて無いようだった。

ならばもう一度、と拳を叩き込もうとしたその刹那

ガイン

「は」

理解が追いつかない。

言葉も喋る余裕もなく、えづきと大剣をくらった跡の痛みがやってくる。敵を倒した安堵からか、段々と視界がぼやける。そして、その場で仰向けで倒れると意識を暗闇へ落とした。

b a t t l e
w i n

ギアっぽいの手に入れたけど、色々と曖昧。

やはりこの世界はクソツタレ。そう言わざるを得ない。

「まさか、クラスメイトの半分が死ぬとは……………」

あのボランティアの一件で様々な人が亡くなった。その中には、泰永もその内の一名となっていた。

「そして俺は病院送り…………… かあ。前は入院したことも無かったけどなあ…………… ハア。」

あの騎士との戦闘で、どうやら脇腹をザツクリされたらしく、後遺症は残らないものの傷痕は出来たらしい。それもそこそこ大きめの奴だった。まあ沙樹にとつては生きてりやOKぐらいの考えだったので、あまり気にも留めなかった。

「そういえば、あのシンフォギアっぽいのであればバサスロットの奴だよな？」

FGO。前世のスマホゲームで、一言で表すと偉人や英雄と共に世界を救う話だった。あの時、自分はその中のキャラクターの一人によく似ていた。

その名がランスロット、もしくはバサスロット。騎士なのに銃や戦闘機を操り、狂った声を上げる姿はまさしく狂戦士バースーカーと言えるようなキャラだった。

バサスロットには能力があった。それが何でも武器として扱える能力、「騎士は徒手にて死せず」。文字通り、棒切れだろうが石ころだろうが十全に扱えるようになるもの。

もし仮にそれが自分の物になっていたのだとしたら、木の棒がノイズに通用したのも納得がいく。

しかし、引つかかることが幾つかあった。それが自分の剣とあの黒い騎士だった。

「あの騎士…………… 見たことが無いんだよなあ。あんなのFGOにいたっけ？」

そう、あの騎士、まるで見たことが無かった。というか、まるで雰囲気が違う。ありふれた表現をするなら、まるで本から飛び出してきたかのような感じだった。

「ううむ。これはやっぱり分からん。というかあの時必死で気にして無かったけど、あのアームドギアって明らかにバサスロットの剣じやなかったな。」

ゲームで見たのとは全然違う。向こうが装飾が施された長剣なのに対して、こっちは無骨な大剣だった。

そもそも、シンフォギアにおけるアームドギアは元の武器としての特性と装者の心象により形成される物、だった筈。実際、原作主人公は拳だったから恐らく、あの大剣も自分の心象が影響したのだろうか。

黒い騎士に関しては……………駄目だ。情報が少なすぎる。取り敢えず覚えておくのは結構なやり手だった事ぐらいだろう。

色々考えたら眠くなってきた。取り敢えず寝ようかな……………そういえばこつてなんにもやる事無いし、結構暇だな。今度じいちゃんかばあちゃんに本でも買ってもらおうかな。

少し大きめの欠伸をすると、意識が段々と薄れてきて、遂には暗闇へと沈み込んだ。

それから数日後。

「はあい、私が今日からアナタのカウンセリングすることになった、『櫻井了子』よ。よろしくね♪」

ふぎけんな。死ねクソババア。

ある日、対ノイズ機関である『特異災害対策機動部』に一つの報告

があった。

それが、ある山にノイズの反応とアウフヴァツヘン波形の反応があった事だ。通常、アウフヴァツヘン波形は聖遺物もしくはシンフォギアが起動した時の波形である事だ。

つまり、あの場に何かしらの聖遺物が起動したということを実証していた。

しかし、実際に山へ赴くとあるのは人の塵と怪我した子供達だけだった。この現状に、司令官である『風鳴 弦十郎』はため息をついた。

「はあ、どうしたものか……………」

そこへ、シンフォギア開発を手掛けてきた了子が司令室に入ってきた。

「どうかしたの、弦十郎君？」

「ああ、了子くんか。この未知のアウフヴァツヘン波形について考えていたんだが、結局なにか分からなくなっただけ。そっちでは何か分かったか？」

「こつちも全然よ。こつちに保管してある聖遺物との情報も全く一致しなかったわ。」

「そうか、ならば仕方ない。もう少し調査をしても分からなかったら、これを未確認聖遺物、『unknown』として正式な保護対象としよう。それと、この聖遺物を所持している人の保護も早急にしなければな。」

「ええ、そうね。正体不明の聖遺物なんて何かがあるか分からないものね。」

二人で話しあっていると、ふと、弦十郎は思い出したように言った。「そういえば了子くん。」

「何かしら？」

「カウンセリングの経験はあるか？」

「いえ、無いけど……………まさか、私に子供達のカウンセリングを？」

「ああ。話が早くて助かる。病院のカウンセラーが人手不足でな。子供達と他愛の無い話でもいいから、面倒を見てほしいそうさ。」

「うーん…………… まあやるだけやってみましょう。ついでに聞いてみましょうか。もしかしたら、あの現場で聖遺物を見た子供もいるかもしれないわね。」

「そうだな。だがあくまでも子供達の心の傷を和らげるのが最優先だ。無理に聞こうとするんじゃないぞ?」

「勿論よ。そこら辺の配慮は忘れないわ。」

そして後日。

「あつ、こんにちは。沙樹です。よろしくお願いします。」

そこに居たのは、やたら目に光の無い、悍しさを人型にしたような少女だった。

「じゃあ始めるわね。まずは」

「あー、死ね。本ツ当にふぎけんな。何だつてこのクソアマがカウンセリングなんかしてるんだ? お前は考古学者兼黒幕ダルオ!?」

「聞いてる?」

「アツハイ、聞いてます。」

「無理しなくていいのよ? 貴方だつて辛かったでしょう?」

「ええ、まあ。ハイ。でも、怪我也治つてきてるし、そんなにキツくも無いです。」

まあ片腹に剣をぶち込まれるのはキツかったかな! などという言葉は心の中に留めると、沙樹は話を聞くフリをしながら思考を巡らせた。

櫻井了子、彼女は一期のラスボスであり、恋する乙女。システムによる輪廻転生を繰り返し、世界を巻き込んででも最愛の人に会おうとした傍迷惑な女。それぐらいの認識だろうか。あとは並行世界では味方だったりもつとやばい奴だったり…………… まあ、一言で言

うと『暴走乙女』とでも呼ぶべきか。

というか、なんでそんな女がここにいるんだよ。帰れよ、二課に。なんなら土に還れ。詫びいれてカディングル解体しろよ。

などと心の中で呪詛を吐きまくりつつ、了子の話をはいはいと聞き流していると、不意に山で起こったことについて話し始めた。

「ところで、貴方はあの現場にいたようだけど何が変なものを見なかった?」

「変な物、ですか?」

「そうね、例えば何かしらの光を放つてたりだとか、ノイズじゃない物を見たりしなかったかしら?」

まずい、沙樹は内心舌打ちをするとどう説明したものかと考えた。実際、見たというか多分それ俺です。なんてラスボスに言える訳ない、拉致されて実験されるのがオチだ。かと言ってここで変に否定すれば何か目をつけられるのでは。

などと、ああでもないこうでもないと考えていると、いいアイデアが浮かんだ。いや、アイデアというよりは思いつきの方が正しかつたかもしれない。

ここで、沙樹は少し考えるような素振りをすると思いついたように、あつと声を上げた。すると了子は目をかつ開いて身を乗り出した。

「何か見たの!?!?」

「はい、あれもノイズか何かの一種だったのかわかりませんが……」

「それでもいいわ! 教えてちょうだい!」

「は、はい! えつと、こう、真っ黒な騎士のようでした。」

「騎士?」

「はい。」

そう、沙樹が思い付いたのはあの黒い騎士に丸投げ、というかスケープゴートであった。これも脇腹にくらった剣の仕返しでもあったりする。

「それ以外に特徴は?」

「ええと、大きな剣を持ってて、あと、盾も持っていました。それと、大きかったです。」

「ふむ、成程……これは調べる価値があるな。」

おい聞こえてんぞ。というかやっぱり正直に言ったら何かしらの行為はするつもりだったんだらう。言わなくてよかった。

それから、少しのカウンセリングという名の尋問を受けてから了子は帰っていった。途中、小声でブツブツと何か言っていた事は聞こえなかったふりをした。

因みに、この責任転嫁を後悔することになるのは少し先の話。

草木も眠る頃。沙樹は一人で目を眺めていた。

なんというか、眠れなかったのだ。色々と身にありすぎて最近是不眠症になりつつある。謎の黒い騎士との戦闘、ラスボスの襲来にクラスメイトが亡くなったなんて、この数週間で起こった事とはとても思えない程濃密だった。

「ハア……… ったく、どうしたもんかね。」

月明かりが差し込む病室に暗い声が木霊した。

正直なところ、シンフォギアを手に入れた事によって、パラドックスのようなものが起きてるんだらう。じゃないとあの黒い騎士についてなんの説明もつかない。なんなら、了子の反応からして恐らく計画になかった物だらう。

大いなる力には大いなる責任が伴う。前世で好きだった映画のセリフが、こんなにも実感させられる日が来るとは思っても無かった。また似たような敵が来るのなら俺が殺さないといけないだらう。仮に放置して原作崩壊なんてことになれば目も当てられない。

だからこそ、自分なりに身の振り方を考えた。それが

主人公達や、敵にも極力関わらず原作に居ないような敵を倒す、『第三勢力』になる事だ。

別にどの陣営からなんと言われようが大した事無い。原作は原作

通りにあるべきで、それを一つでも流れを変えてしまうとまたそこから次々と流れが変わっていく。そして終いにはバッドエンドとかになったら俺は自害する。

いつしか読んだ、主人公が異世界に行って無双するような小説と違ってここは現実だ。転生特典みたいなのはあれども、無双なんて出来なかったのが黒い騎士との一戦で証明されていた。

「もっと、強くならなきゃな。」

そうこう考えている内に眠くなってきた。いそいそとベッドに潜って今にも寝ようとしたところで、窓の向こう側と目が合ったような気がした。

ライブに行こうかと思っただけど、どうしよ。

あれから数年。中学生になった俺は

「もつと腰を入れて打て！それじゃあ当たらんぞ!!？」

「はい！」

山で特訓してます。

いや、なんでやねんと思うかもしれないが、これにはれっきとした理由がある。

あの騎士との戦闘以来、自分の力不足を感じた。筋力、技術、体力、全てにおいて足りない、そう思った。このままじゃこれから出てくるかもしれない未知の敵はおろか、ノイズにもボコられる。

もしそうなってしまつては原作主人公の足を大いに引っ張る事となる。それは避けたい。

しかし、そうは言つても我流で鍛えるのにも限界があるだろう。さでどうすつかなあ、と考えたところ、前にじいちゃんが生身で熊を殴り飛ばしていたのを思い出した。

もうそこから動き出すのは早かった。土下座しながら頼み込むと、最初は拒否していたじいちゃんだったが、何度も頼み続けると渋々ながらも承諾してくれた。

そんなこんなで鍛えてもらうことになったが、最初はもうキツかった。某暗黒卿みたいに一方的にボッコボコにされた。なんだアレ。距離詰めたら地面に埋められてたり、距離とつたらいつの間にか背後にいたとか。あんな無理ゲー、フロムゲーよりも難しいぞ。

それでも、途中からなんとか目で追えて対処することぐらいは出来るようになってきた。因みに勝てた事は一度も無い。

「どうした！敵を前に考え事をしとる場合か！」

「そんなんしてねーよっ！てか強いんだよジジイ！」

そうこう考えていると、不意にじいちゃんからの鋭い左ストレートを打ってきた。しかし沙樹はそれを顔面スレスレで右に体を逸らす

と、お返しとして逸らした勢いを利用して、左足でハイキックを叩き込んだ。

「甘いわ！たわけが！」

すると、じいちゃんはハイキックを右手で掴み、思いつきり持ち上げた。

「おわ、ちよつ、待つ」

「待ったなしだ！」

そこからは一方的な蹂躪である。右手だけでグルングルンと沙樹をぶん回すと、ありとあらゆるところに叩きつけてきた。それも、木や岩などが軋んだりするぐらいの強さで。そして最後にぶん投げた。

ぶん投げられた沙樹は、辺りの木をへし折りながら巨岩へとめり込むようにぶつかかった。因みに沙樹は3回叩きつけられた辺りでもう意識が飛んでいた。

「やっぱり強くない？じいちゃん。」

「そりゃあそうだ。大人だからな！いつでも子を守るようにしないといかんからなあ！」

「すげーなOTONA。その技術とかはどうやって鍛えたの？」

「まあ昔に色々とやったんだ。ほっほっほ、懐かしいの。」

何かはぐらかされたが、あまり気にせず気の抜けた相槌をうって水分補給していると、近くに置いていた携帯が鳴った。

携帯を手に、連絡先を見るとそこには中学に上がってから仲良くなった友達の名があった。通話ボタンを押してから耳を近づけると、喧しい声が響いた。

「もしもs」

「聞いて聞いて!!？ライブのチケット当たった!!？」

「うるさっ」

あまりの大きな声にびっくりして携帯を耳から遠ざけた。耳鳴りがしてきて思わず顔を顰めたが、ゆっくりと携帯を耳に近づけて丁度

いい距離にした。

「わかった。わかったから落ち着いて？両耳がトンネルみたいに開通しちゃう。」

「あ、ごめんごめん。」

「それで、何のライブ？テイラー？ジャステイン？」

「何で外人ばかりなの？えーとね、何だと思う？」

「よーし切るぞー。」

「ごめんて。それで実は！ツヴァイウイングのチケットが手に入りました〜！」

は？

「えへへ、驚きすぎて声も出ない？」

「あ、ああ。凄いね！びつくりしすぎて心臓止まった。」

「それ死んでない？まあいいや。さらにね、そのチケットもう一枚あるんだあ〜。」

oh Jesus！神はどうやら俺が嫌いらしい。というかこれただの死刑宣告やん。遠回しに死ねって言ってるような物じゃん。いや、でもまだ別の友達と行くって話をするだけかも……………！

「へ、へえー。そうなんだ……………」

「そこでさ、一緒に行かない？二ヶ月後なんだけど！生のツヴァイウイングだよ！絶対凄いつて!!？」

嗚呼ゴミカス、死ぬ。神はどうしても俺を殺したいらしい。俺何かした？なんなら菓子折り持って詫びに行くよ？

と、まあ愚痴っついても仕方がないので、やんわりと否定する事にした。

「いや〜、ごめん！その日さ、私のおじいちゃんと用事があつて行けそうに無いんだ！だから「いいぞ。」

……………え？」

「行つてくるといい！偶には友と遊んで交友を深めてきなさい。」

すげえ、本格的に逃げ道が潰された。ここまで来ると笑えてくるわ。あとジジイのその優しさは、もうちよつと下手のところて発揮してほしかった。

「あ、今のおじいちゃんの声!? だったらいいじゃん！行こうよ!!?」
「うん、ソウダネ…………… ハハハ。」

バックレようかな。などと考えながら俺は友達の話聞き流した。

時計の針が12を指す頃。

目をぐしぐしとこすると、ベッドに腰掛けた。

やっぱりじいちゃんの修行はイカれてるせいかな、ほぼ毎日が筋肉痛だった。このままだとアスリートになりそうだな。と独りごちると、近くの机の中から小さな手帳を取り出した。

手帳を開くと、そこには『仮称「アロンドイト」について』と雑な字で書かれていた。

さて、この数年間はただただ修行していた訳では無い。修行の合間を見つけてはちよくちよくとこの『力』についての実験などもしていた。

『力』と表現するのは、少しシンフォギアとは異なる力を持っていた事だった。いや、正確には聖遺物が見つからないことにあった。

原作だと聖遺物と融合した主人公はギアを纏う時、『胸が熱い』などと言っていたような気がする。ならば俺もこれ纏う時に何かあるのでは？

そう考えていた時もありました。

まさかの何も感じない。流石にこれは笑うしかなかった。詠唱からのギアインナーや鎧を装着するところまでは良かったのだが、それまでにも何も感じなかった。本当に聖遺物埋まったりしないかこれ？

そのまま首を捻って考えていたら二課の連中が来て大変だった。なんと装者だけでなく司令のOTONAまで来た。てかあんたもへりから飛び降りて無傷で着地ってどういう事だよ。やっぱり人間じゃないだろお前。聖遺物の一種かなんかだろ。

因みに二課にはバレてなかった。これ以降も何回か付近まで来た

ことはあれども、完全に見つかって追っかけられたりも無い。

その理由として、F G Oのランスロットの保持するスキルの一つ『己の栄光の為でなく』という宝具がある。これは自分のステータスや姿を隠蔽し、相手から見えなくする。という物なのだが、何故かこれが発動したらしい。

やっべ、隠れる隠れる。なんて考えてたら、いきなり体から黒い霧が出ていた。因みにこの能力はアウフヴァツヘン波形やエネルギー反応まで消すらしい。実際に二課の連中が探しに来た時は数時間だけ探して帰っていった。以降、この『力』を使う時はこの霧を纏いながらにしている。

次に、木の棒を使った対ノイズ用武器化についての実験をした。

最初に『力』を使った時、木の棒がノイズに通用したこと。それがやっぱりF G Oのランスロットの宝具『騎士は徒手にて死せず』というのがある。これは単純にうなじからのコードや手に持った物を武器として扱えるようになる物。

これを何回か使用してみて分かったことがあった。それは、自分の発想次第では何にでも武器となり得ること。棒は勿論の如く武器化し、石ころ、果てにはタライまで武器化していた。つよつよじゃん。ただ、ひとつだけ疑問が残る。もしシンフォギアを武器化したらどうなるのか、それが気になった。武器化したら展開されてアームドギアが使えるようになるのか、もしくは何も反応無しなのか。そこら辺は機会があったら検証する形でいいだろう。

そして、最後にアームドギア。それに1m弱の鉄棍が追加された。握ってみると、赤い筋が入った。完全にこれバサスロットの使ってた奴だよな？

因みにこれは、『騎士は徒手にて死せず』の実験の産物で出来た物。自然あふれる所ならまだしも、市街地や基地とかにそう簡単に武器と見つかるのか？と考えながら実験した結果、いつの間にか出来た。やっぱりこれも心象変化の効果なのだろうか。まあ武器は幾らあっても良いだろう。

「やーっぱり個人で研究出来るのもこれぐらいだよなあ。」

5秒間の大きなため息を吐くと、手帳を閉じて机の中に入れるとベッドに倒れ込んで足をぶらぶら揺らした。

「あく、ライブ、行くのやだな………………。つかあの騎士も出てこねえしなあ。」

そう、あの山での遭遇以来、一切姿を表していない。やっぱりあの時だけなのかなあ。なんて考えていると、ふとある考えが浮かんだ。

「もしかして、ライブ会場に出るのか？いや、考えすぎかなあ。」

もしかしたら、と考えが浮かぶ。実際、あのライブはストーリー上でも結構重要なポイントになる。そこを狙ってあの騎士の仲間とかによる何かしらの茶々入れがあるかも。と、考えた所で胸騒ぎが止まらなくなってきた。

沙樹はなんかもう色々複雑になってきて頭をガシガシと掻いた。

「つあー！もう！行くしかないやんけー！」

「静かにしなさいー！」

「あっはいー！」

やけっぱちになって叫ぶと、梅子さんに怒られた。すいません。と心の中で謝ると、ベッドと布団の間に体を挟んだ。

「寝るか……………ハア……………」

目を閉じると、案外早く意識は落ちた。結構疲れていたらしい。

外では雲が月を隠し、雨粒が窓を叩いた。

そして、二ヶ月後。

「ねえ、君の名前は？よければ教えてくれないかな？」

「わ、私の名前は立花響！年齢は13歳！えつと誕生日は

」

そして少女たちは邂逅する。

ライブに行つてから、碌な目に合わない。

ライブ会場にて、特異災害が発生、ノイズの出現により幾人もの死者が出た。

しかし、死者はノイズによる者よりも逃げ出した観客によって、下敷きになって潰された方が多いとの特異災害対策機動部による発表があった。

なお、ライブに参加していた全員に政府からの補償金が出る予定とのこと。

ある新聞の切り抜きより。

やらかした。

そう思いながら人生3度目の病室の天井を眺める。やっぱりこの独特なアルコール臭はなかなか慣れそうにない。

さて、何故こんな事になつてるか。そしてあのライブ会場にて何があつたのかと言うと、単純にノイズが出て、それから逃げる客の下敷きになって色々巻き込まれた。その結果、左足と右腕の骨折と肋骨にヒビが入つてた。痛え。

因みに一緒にいた友達も巻き込まれた、そして死んだ。呆気なく下敷きにされて頭とかも踏まれてるのを見て、『あつ、こいつ死んだな』と俺も踏まれながら思つていた。

因みに、ノイズの出現などの大まかな流れは大体原作と一緒にだつた。例の騎士なども出てくる事なく、さつくりと装者の一人は絶唱して消えてつた。

「やっぱりライブ行かないきやよかつたなあ。」

自然と愚痴が出た。本当に行くだけ無駄だったと思う。これじゃ文字通りの骨折り損のなんとかだ。

そしてなによりも、面倒なのが

「ふう、疲れた〜。リハビリってこんなにキツかったんだね。」

隣なんだよなあ、原作主人公。

看護師に車椅子で押されて来たのは、アニメにおける主人公こと、『立花 響』だった。

病室で目が覚めて、知ってる天井だ。と思っていると目覚めたのに気づいて、ナースコールのボタンを押してくれたのが響だった。最初は気付かなかったが、改めて名前聞いたら響でビックリした。ビックリすぎて宇宙猫みたいになっていた。本当に誰か意図的に配置してない？

それからは少し喋ったりしながら二人でリハビリを頑張っている。喋るといっても、こつちから喋る事はあまり無く、響が一方的にこつちに喋りかけてるのに相槌を打っただけだが。

「そういえばね、今日は結構歩けたんだ！」

「へえ、凄いね。」

「うん！看護師さんからも頑張ればあと1ヶ月で退院出来るかもって言うってた！ところで何読んでるの？」

「それは良かったね。あとこれは『アーサー王伝説』。結構面白いよ。あと、少し寝るよ。おやすみ。」

「えっ、あ、おやすみなさい……………」

ちよつと寂しそうな響を無視して、本を枕の脇に置くと目を瞑る。やっぱり響との会話って意外と疲れる。結構ガンガン質問してくるからかとても神経を使う。

おそらく俺よりも例の幼馴染が見舞いに来るだろうから、あまりこつちから触れる事は無い。ほら、このままなあなあで原作に関わったら多分縁でもない事になる。

目を瞑ってしばらくすると、病室のドアが開く音がした。それに次

いで『お父さん!』と喧しい声が聞こえた。どうやら、響のお父さんである『立花 洸』が来たようだ。正直、眠たかったが何の話か少し気になったので、寝たふりをしながら聞き耳を立てる事にした。

そういえばこの男、原作だと失踪してからダメ男になって再登場するのだが、まだこの時期はまともなようだ。

それからは、響と洸は他愛の無い話をしていった。家がどうの、とか体調はどうだ、とか。一通り色々と話した所で、洸が真剣な声で話し始めた。

「実はな、響。伝えなきゃいけない事がある。」

「何かあったの?」

「ああ、小日向ちゃんが引越したそうさ。」

「え?」

あ?

「ちよ、ちよつと、お父さん。そんな冗談は」

「冗談じゃないんだ響。小日向ちゃんのお父さんが仕事の関係で急遽引越す事になったみたいなんだ。」

「そ、そんな、未来が……!」

響はショックだったのか、咽び泣いていた。そんな響に洸は大丈夫だよと言って励ましていたようだった。

沙樹はこの会話を聞いて、あつ、とある事を思い出した、そういうえばゲームにこういうのあったなあ、と。

シンフォギアXD。前にやったシンフォギアのソシヤゲで、イベントの一つに並行世界で幼馴染が居なくてグレた響みたいなのがあった。

「(まあここがその世界線なら俺も関わらなくていいかな。)」

その世界線であれば、響は勝手にグレて後から並行世界から原作の装者が来て、全て解決してくれるだろう。

沙樹は、安心しきって本格的に眠ろうとしたところで、ふと疑問が生じた。

そういえば、その世界線に子っていたっけ?

「(どうだったっけ? 少なくともストーリー上には子やファイネの

名前が無かった、筈。あの世界線って弦十郎が機械いじってたけど……。不味いな、記憶が曖昧でどうだったか思い出せない。」

心の中で頭を抱えながらも思慮を巡らせる。仮にフィーネが存在するならば精神的な支えの無い響は勝てるのか。恐らく、答えは否。精神的に不安になった所でフィーネにボコボコにされて、全滅エンド直行になるだろう。あかんこれじゃ装者が死ぬウー！

少なくともフィーネが勝利する、なんてものは絶対に避けなければならない。仮に、装者が生きていてもフィーネのせいで、5期のラスボスが降臨されてどの道全滅エンドだ。

殆ど詰みの状態だが、回避させるにはどうすればいいかと考えてると、天啓ともいえることを思いついた。

「(これだ、これしかない！この詰みを回避する一手は！)」

月が登り、非常灯の緑が暗がり映える頃。

響は上半身を起こして、最近あった事を思い出していた。

ライブでノイズに襲われた事、奏さんに『生きるのを諦めるな』と言われたこと、そして何よりも、自分にとっての『陽だまり』が居なくなつた事。

彼女にとつては、これが短い期間であつた事とは未だに実感が湧かなかず、顔を顰めた。

「私、呪われてるのかな……？」

ポロツと零れ落ちるように言葉が出てきた。目から透明な液体が流れ落ち、暗いシミを作った。

暫くしてからいざ寝ようとすると、隣から布団の擦れる音が鳴って

一瞬だけ驚くが、ただの寝返りのようだったらしい。

そういえば隣は『方波見 沙樹』という少女らしいがあまりしつかり話してないなあ。明日も話しかけようか、でもあんまり話したくない様子だったけどなあ。と考えたところで、さつきと寝ようかと頭に枕を乗つけたところで微かな声が掛かった。

「ねえ、起きてる?」

「うわっ!?」

「静かに、看護師が来ちゃう。」

「あ、すいません……………」

ビツクリして大きな声を出したら諫められた。

しかし一体なんなのだろうかと疑問に思っていると、思いもしなかった事を言われた。

「ごめんなさい。」

「うえっ?」

「今まで冷たく接してきて本当にごめんなさい。」

「えっ?ちよつと、なんで謝るんですか?」

「実は、さつき寝ようとしてた時、さつきの話が聞こえてきちゃって……………」

ここで響はあつ、と声を漏らした。どうやら昼のお父さんとの会話を聞かれてたようで、ならば泣いていた事も聞かれていたと思うと、響は少しだけ羞恥心を感じた。

そんな響を知ってか知らずか、気にしてないように沙樹は続けた。

「その、友達のこと聞いて、自分だけが不幸じゃないんだって思ったら、私が八つ当たりしてるのも駄目だなって思った。」

「ううん!別に大丈夫。私は気にしてないから!」

「そっか、よかった。じゃあ、これから宜しくね。」

「うん!宜しく!」

それから、外が明るくなるまで二人は話し続け、仲良く目の下に隈を作った。その結果、看護師に軽く叱られる事となったのはここだけのお話。この一夜で、響はなんとなくこれからも仲良くなれそうだと思った。

一方、沙樹はというと

「(よっしやあああ！最初は上手くいっただぞ!!？未来の代わりに俺が支える、名付けて『俺が陽だまりだ』作戦！あとは高校まで支えていればどうにかなるっしょ!)」

打算マシマシであったとき。

上等だ、やってやるよクソツタレ。

「これは、何というか凄いね。」

「うん…… やつぱり私、呪われてるのかな？」

「そんな事無いさ。生きてれば誰かから非難される事だっただけだと思
うよ？まあ、これは些か度が過ぎていると思うけどね。」

子供達が腹を空かせて家に帰る頃。

目の前にあるのはスプレアの塗料と罵倒の書かれた紙が大量に貼
り付けられた建物。そこは、響の家だった。

二人揃って大きなため息を吐くと、ブラシやら雑巾を持ってきてわ
しやわしやと汚れを落としていく。これが二人の日課になりつつ
あった。

今日の落書きの中には、やたら強力なペンキなどもぶち撒けられて
おり、塀にうつすらとペンキの跡が残ってしまった。

「この間は窓ガラス割られて、昨日は郵便受けの中に残飯。んで今日
は落書きか。これは相当だね、響。」

「うん。でもへいき、へっちゃらだよ！沙樹も手伝ってくれてるしー！
「ありがとう、響。無理だけはしないでね。辛かったらちゃん頼つ
てね？」

「勿論ッ！頼りにしてるよ、沙樹！」

家の前で別れると、沙樹はすぐ近くの路地裏に入り込んで響の家を
監視し始めた。

こうしているのには少し訳がある。それは、前に日課の清掃が終
わってすぐのことだった。ある日掃除していると、何人かの見知らぬ
男がバットやスプレー缶を手に襲い掛かって来たのだ。

勿論響は警察に通報、沙樹はOTONA譲りの体術によって事なき
を得たが、駆けつけた警察官が響達をライブの生還者だと知ると、襲
い掛かって来た男達を見逃し、寧ろ響達を叱った。こんなことで警察
を呼ぶな、と。

「チッ」

あの時の事を思い出して舌打ちが漏れた。あの警官、次会ったら半殺しにしてやる。

まあ、それ以来あの男達がまた来るとも限らないので、こうして響の家を監視している。

暫く家の前を見ていたが、少し暇になつてきたのでイヤホンを片耳に付けてニュースを聞き流す事にした。

相も変わらず棒読みなニュースキャスターの声を聞いて、憂鬱な気分が深くなつていく。そこから、チラチラと携帯の画面と響の家を交互に見ていると、不意に気になるニュースが耳に入ってきた。

「次のニュースです。東京都在住の〇〇XXさんが公園で亡くなつていました。警察によると相手から見て右肩から左脇にかけて切断された状態だったようです。」

「(切断? 珍しいな。よつぽど恨みがあったのかな?)」

そのニュースを聞いていると、発見者のインタビューに移ったのか老人の声が聞こえた。

「いやー、びつくりしたよ。まさか人が死んでるなんて思つてなくて腰抜かしたよ。そういうえばその近くで大きな人影をみたよ。かなり大きかったね。」

「……………はい、現場でのインタビューでした。地域に住む人からはXXさんは特に問題を起こす人ではなく、ボランティアにも手伝うような優しい人だったとの事です。では、次のニュースです」

「大きな人影、ねえ。」

額にうつすらと浮かんだ汗を拭う。

実際に、肩から脇まで切断できるのは、よほど力のある人間が大きな道具を使わないと無理だろう。もしくは何か機械を使うか。しかし、過去に出来そうな人を一人だけ知っている。

そう、それこそあの騎士だ。シンフォギアもどきとはいえ、防御して踏ん張った俺をぶっ飛ばす力を持つくらいだ、多分今回の犯人もそれだろう。

「どの道調べないとなあ……………」

また面倒が増えたと愚痴を零すと、立ち上がり周りを見渡す。今のところは問題無いか確認していると、響の家の前に黒づくめの服を着た男達がやって来た。

「(うつわ明らかに怪しいじゃん。止めるか? いや、でもやる前に行く
と難癖付けられて終わるな……)」

どうするか迷っていると、男の一人がペットボトルを取り出して中
のものを撒いた。ふわりと漂ってきた鼻に付くような匂い。それは
ガソリンそのものだった。

沙樹は、ガソリンだとわかった瞬間に駆け出した。

「ちよつとー何やってるの!?」

「ああ?」

声をかけると男達は眉間に皺を寄せながらこつちを睨みつけてき
た。

「それ、ガソリンでしょ。何するつもりなの?」

「オウ、うるせえぞてめえ。この家に火い付けるに決まってるんだろ。
大体この家の奴が何やったか知ってるか? あのライブで人を踏んづ
けて逃げた犯罪者だぜ? 犯罪者にはそれ相応の報いって奴を俺達が
やってあげてんのさ!」

「さつきから聞いてれば! それはただの身勝手でしょうが!」

あんまりな言い分に反論した瞬間、男達が懐から警棒やらナイフや
らを取り出してより一層睨みつけてきた。

「ちっ、うるせえ! あんまりごちゃごちゃ言つてつとぶつ殺すぞ!」

「お、殺るか?」

全く引き返そうとしないので、戦闘態勢を取った沙樹だったが一番
後ろにいた男がライターを取り出してにやけた。

「おいおい、どんだけ自信あんのか知らねーけどよ、変に動くと燃やし
ちまうぜ?」

「んなっ……!」

まずい、此処で響の家が燃えてしまえば中にいる響ごと死ぬ事にな
る。仮に響が生き残ったとしても心に相当なダメージが入る。本当
にまずい。幾ら考えても打開策が見つからない。

少しだけ躊躇すると仕方なく戦闘態勢を解いた。すると、待つてま
したと言わんばかりに、男の一人が警棒で顔面を殴った。

大振りの素人の一撃だったが、男というだけあって中々の威力でそ
の場で倒れてしまった。

「つぐ…！」

上手く受け身は取ったものの、顔面にクリーンヒットしたせいで視
界がぐらつく。

起きあがろうとしたら頭を思いっきり踏まれて、グリグリと踏みに
じられる。アスファルトと靴の感触が心地悪くて、とてつもない程の
ストレスを感じる。

「ほら〜どうした？無様でちゅね〜？」

「こんのっ、愚図が…！！！」

「はいはい、口でしか何も言えないもんね〜？」

ギリツと歯が軋む。悔しそうにしている沙樹を見て笑っている男
達だったが、突如大きな声である提案をし始めた。

「おい、もう燃やそうぜ。なんか飽きた。」

リーダーであろう沙樹を踏んづけてる男は、ライターを持った男に
指示すると、ゆっくりとガソリンを撒いたところに近づけた。

「おい、やめろ！」

「残念でした。犯罪者には罰を与えないとな！」

その時、沙樹の中の何かが切れた。

それは緊張感か、あるいは堪忍袋の緒か、またはもつと別の十二カ
かもしれない。

しかし彼女にとってはそれもどうでもいい事。まずはこの目の前
の人の形をした獣を駆除することしか頭に無かった。

「そうか。」

「んあ？」

「そんなに死にたいか。」

男達からしてみれば、それは恐怖。格下に見ていた女がいきなり霧

困気が変わり、底冷えするような声色とともにこちらを凜猛な目で見ていた。

「っひい!!?」

そして、踏んづけていた足を離した、否、離してしまった。

「knight of crazy Arounding tron」

透き通るような声で紡がれた聖詠。知らない人からすればそれは天使のような声に聞こえるだろう。しかし、目の前の男達からしてみれば、それは処刑のカウントダウンに他ならない。

倒れ伏していた沙樹から黒い霧が立ち込め、体を包んでいく。その間に彼女は立ち上がって男達を見据えた。そして霧が晴れた時、そこに居たのは、真つ黒な騎士だった。

「な、なんなんだよお前!?!」

「さあ? 知らなくてもいいだろ? どうせ死ぬんだからなあ!」

沙樹がそう言った瞬間、さっきまで踏んづけていた男にアッパーをお見舞いした。すると、男は数メートル程真上に飛び、落ちた時には瞳孔が開いていた。

「次。」

ナイフを持っていた男の胸ぐらを掴むと思いつき真上にぶん投げた。その間に左腕に力を溜めるようにして構える。

そして丁度いい位置に降ってきたところで、思いつきの左ストリートをかました。

「うわっやめ」

それが男の遺言だった。繰り返された拳は音速となり、男の顔を原型も分らないくらいに歪めた。

男の体は吹き飛び、ぐにやりと曲がった体勢のまま動かなくなつた。

「うわああああ!!?」

目の前で人が死んだことでやけになったか、あるいは仲間の敵討ち

かどうか分からないが、鉄パイプを振りかぶり別の男が襲いかかってくる。

しかし、いずれも素人同然。そこら辺でかじっただけの喧嘩など、沙樹からすれば取るに足らないものだ。

振り下ろされた鉄パイプを掴むと、逆にこっちが鉄パイプを引張って男から奪った。

男はあっさりと鉄パイプを取られたことで呆気にとられていたが、次第に正気に戻り逃げようとした。しかし、この惨状を見てしまった腰が抜けてしまっていた。

一方、鉄パイプを奪った沙樹は、鉄パイプを強く握りしめると、握った部分から赤い筋のようなものが入り始めた。その色は血管よりも濃い、ドス黒い汚い赤だった。

「や、やめてくれ！あやまる！あやまるからあ！」

「詫びは天国でいれてくれよ。」

フルスイング。おそらく、これがゴルフボールならばホールインワンするぐらい綺麗なフォームで頭をぶち抜いた。

頭こそ取れなかったものの、首が変な方向に曲がってることから、もう二度とこの世では目が覚めることは無いだろう。

「んじゃ、最後な。」

ライターを片手に持った男に歩み寄る。男は半分放心状態であり、股間からは微かなアンモニア臭がした。

「ああ、あああああああ!?？」

此処で、今の状況を理解したのか半狂乱になりながら慌てて逃げようとした、その時だった。

ガシャン、と遠くから金属音が鳴った。突然聞こえてきた音に沙樹は一瞬だけ呆けたものの、聞き間違いかと思って男を追いかけようとしたその刹那、ソレは姿を現した。

男の逃げた方向にあった曲がり角から出てきたのは、くすんだ鋼を身に纏い、身の丈程あるタワーシールドに古びた重厚な剣を肩に乗せた、あの黒い騎士とはまた別の2m越えの騎士だった。

騎士が出てきた瞬間、沙樹はニュースに出てきた公園で男を殺した

奴だと直感的に分かった。そして、コイツが原作にも出てこないであろう事も。

「うああああああ!!?」

いきなり出てきた騎士に驚いて情けない声を上げた男だったが、騎士は男を一瞥すると、剣を振り上げた。

これには、沙樹は止めようともしなかった。男は縋るように此方を見ていたが気にすることなく兜から冷たい眼差しを送っていた。

鋼の響く音と肉と骨の音がミックスされて、そこには真つ二つに分かれた肉塊があつたが、沙樹はあまり気にしない。そして、騎士も此方を見据えると剣と盾を構えた。

「お前、公園で男を殺したか?」

沙樹は、少し気になった事を問うが、騎士は構えた状態でジリジリとにじり寄ってくる。

答える気が無いんだろう。沙樹はそう判断すると右手に力を込めた。すると黒い霧が集まり、赤い筋の通った黒い鉄棍が握られていた。

沙樹も両手に鉄棍を掴んで構えると、騎士はにじり寄るのをやめて走って突っ込んで来た。

そして、激突。真つ直ぐに突き出された剣と、斜め上に振り上げられた鉄棍が火花を散らした。

戦闘、開始。

f i n a l w a v e

取り敢えず、こいつ潰すか。

ある日、ライブの後処理に追われていた特異災害対策機動部二課、略して『特機部二』にアラームが鳴った。

それは、ノイズを知らせる為ではなく、ある聖遺物を知らせる為に設置した特殊なアラームだった。

アラームによって周りが騒がしくなった。コーヒーを飲んで一息ついていた二課の司令、弦十朗は急いでモニターを見ると、そこには『unknown』の文字が。

「状況は!?？」

「ノイズは出現しておらず、聖遺物の反応のみ……………いや！聖遺物以外のエネルギー反応あり！」

弦十郎の問いにオペレーターの一人、『藤堯 朔也』が答える。そして、もう一人のオペレーター、『友里 あおい』がキーボードを叩きながら叫んだ。

「映像、出ます!!??」

そして映し出されたのは

「黒い騎士、だとおツ!?？」

そう、了子の報告にあった例の山で見かけたと言われている黒い騎士。所々の差異はあるものの、大概の情報は間違っていないかった。

そんな黒い騎士が、鋼の巨体の騎士と戦っていた。この状況に一瞬の思慮を巡らすも、まずは民間人の避難が先だと思い直して指示を飛ばした。

「まずは民間人の避難が先だ！それと被害は!?？」

「殆どが避難していません！遠巻きに見ています！」

「被害は拡大しています！周りの建物を巻き込みながら戦闘をしているようで、中には死傷者も増えているようです！」

「くっ、一課に避難誘導をさせろ！それとメディア関係者がいたら報道規制を掛ける！翼!!??」

ひとまず民間人に対する指示を出すと、二課の装者、『風鳴 翼』に通信を始めた。

すると、かなり焦った様子で返事が帰ってきた。

「はい！現場に急行中です！」

「いいか翼！まずは民間人の避難が優先だ！それと例の黒い騎士には注意して接触するんだ！」

「はい。」

通信が切れたところで、弦十郎も一旦ため息を吐いた。そして残りのコーヒーを一気に呷ってモニターを見つめた。

「最悪、俺が出なければならんかもな……………」

あるシヨツピングモールにて。

ギヤリギヤリと音を立てながら金属が擦れ鳴り響く。それぞれの得物を振るう度に火花が散り、周りのコンクリートに傷を付けていった。

黒い鎧を身に纏った沙樹は、鉄棍を突き出すとタワーシールドで防がれ、そのタワーシールドを持った鋼の騎士が剣を振り下ろすと、沙樹が横っ飛びに回避して避けられる。

まさに一進一退の状況にあり、決定打が見つからない状況だったが、先に騎士が動いた。

騎士が横薙ぎに剣を振るい、そこで沙樹は鉄棍で防ぐ。その瞬間だった、沙樹が防いだのを待ってたと言わんばかりに、タワーシールドが突き出され、沙樹はモロに衝撃を受けて吹っ飛んで地面を転がった。

「ガツッ?？」

それを好機と見た騎士は、その巨体からは見合わないようなスピードで突っ込んでくると剣を突き出した。

しかし、沙樹も負けてはいない。突き出された剣を上半身を捻って紙一重で躲すと、両手で騎士の腕を掴んで背負うようにして投げた。騎士にとっては、かなり近くまで接近されては盾も構えれず、どうしようも無かった。

所謂、一本背負いとも呼ばれる技をくらった騎士はタイルを転がりながらも、地面に剣を刺して無理矢理止まった。両方の視線が兜越しに絡み合う。

そして、その一連の流れを見た野次馬が歓声を上げながらてんやわんやと騒いでいた。

「(クソ、どうしてこうなった?)」

それは少しだけ時を遡ること十数分前。一回響の家の前で戦っていたが、これでは響の家にも被害が及びかねないと沙樹は判断して、遠ざけるように誘導しながら戦っていた時のこと。

あろうことか、沙樹は騎士の攻撃を受けてショッピングモールの窓ガラスに激突してしまい、追いかけてきた騎士もモール内に入ってきた為、そこで戦闘をせざるを得ない状況になった。

さらに一部の客がドラマの撮影だのなんだのと騒ぎ立てたせいで他の客もそれを信じてしまっている。

「(正直、客なんざどうでもいいけど派手に暴れて死人が出ると厄介なことになる。)」

こんなところで大量の死傷者を出したら、二課や政府に目をつけられて大変な事になりかねない。かと言って、場所を変えようにも野次馬に囲まれているせいで、無理矢理にも場所を変えようとするると巻き込まれる人は出るだろう。

「チッ」

小さな声で舌打ちをしながら鉄棍を構えて駆け出す。今度は片手で構えて力を込める。すると、握った部分を中心に赤い筋が増えた。

今度は沙樹の方から動き始めた。騎士に一瞬で肉薄すると、鉄棍を振り回し、突いて次々と攻撃する。これには、騎士も攻撃する暇も無くただタワーシールドでその連撃を防いでいた。

沙樹はタワーシールドに眼前まで近づくと、タワーシールド上部の

縁に左手を掛けて思いつきり跳び上がった。

これには騎士も呆氣に取られたが直ぐに剣で防ごうとした。しかしもう遅い。沙樹は手に持った鉄棍に、より一層力を込めて騎士の兜に振り下ろした。

「死ねオラアッ！」

紅の残像を描きながら叩きつけた鉄棍は、兜にクリーンヒット。

この一撃に騎士も兜も耐えられなかったのか、兜は少しへこんで、騎士は片膝をついて顔を俯かせた。

騎士に膝をつかせた事で、野次馬も大盛り上がりしていた。

「ハア………ふう。」

中々強かったなあ、と思いつつ沙樹は息を落ち着かせた。正直、疲れもあつてその場で座り込みたかったが、せめてこの中から逃げてから一息つこうか。なんて考えてた時だった。

「皆さん！避難してください！」

男の大きな掛け声と共に武装した男達が次々と入り込んで来た。あれはたしか、自衛隊、もしくは特異災害対策機動部の一課だった筈。なんか見たことあるなと思つたらそういう事か。

「ここは危険です！それにこれは撮影などではありません！避難してください！」

本物の隊員の言葉に、流石にこれが本物の殺し合いだと分かったのか皆逃げるように避難していった。

そして、黒服にサングラスを掛けた人達もやって来て、沙樹と騎士から少し離れたところから無線機を片手に何処かへと通信を始めた。おおよそ二課にでも連絡してるのかな、などと、ぼーつとしていたその時だった

歌が、聞こえた。風が切れそうな程鋭い歌が。

次いで聞こえたのはモーター音。慌てて後ろを向くと、そこには無人のままこつちに向かつてくるバイクと、高く飛んだ一流アーティストの片割れだった。

「ハアッ！」

「ツ!!？」

そのまま飛んだアーティスト、風鳴翼は刀のアームドギアを落下しながら振り下ろしてきた。そして、沙樹は鉄棍を両手に防ぐと薙ぐようにして翼を追い払った。

「いきなり切りかかってくるとは、一流アーティスト様も恐ろしいことするね。」

「黙れ。何故今になって出て来た！アンノウン！」

いきなり切りかかられて黙れと言われた沙樹は首を傾げた。それに出てくるアンノウンという言葉も聞いた事が無く、頭上にクエスチョンマークを浮かべた。

「は？アンノウン？何だそれ。てか今になって出てきたって、どういう事だ？」

「…………… つ！その力だ！その力がありながら何故あのライブの時に来てくれなかったんだ！もしかしたら、奏は！死ななかつたかも知れないのに！」

キツと鋭い目つきで睨んでくる翼を見て、何となく言わんとしてることが分かった。アンノウンとは恐らく俺に付けられた仮称で、もう一方は詰まるところ、『お前来たら奏助けられたんだぞ』とそういうことだろう。

沙樹はどう答えたもんかと兜の中で眉に皺を寄せた。正直に、踏まれてそれどころじゃ無かったと喋ってもよかつたのだが、言ったとしても翼に言い訳無用と切り捨てられる事だろう。

さらに、多分この会話すらも聞いているであろう二課に、ライブで怪我して入院した者のリストを調べられて、俺の特定にも繋がるかも知

れない。

ならばもう色々とはかしながら言おうか、と沙樹は口を開いた。

「俺にも色々あつたんだ。」

「何ツ？」

「俺も、それどころじゃ無かつた。出来なかつたんだ。」

「そんな！言い訳が通ると思つたのかッ！」

翼は刀を構えると刀は巨大化し、そのまま巨大な斬撃波を繰り出した。その動作を見て沙樹は翼から距離を取つて、横っ飛びに回避した。

斬撃波はコンクリートの柱に亀裂を生じさせたのを見て、沙樹は内心で震え上がった。こんなの食らつたら死ぬ、そう思わせた。

「ハアアアアッ!!?！」

そして、追撃してきた翼に鉄棍で応戦する。取り敢えず落ち着いてもらう為に気絶でもさせるか、と考えながら翼から繰り出される攻撃を受け止める。その時だった。

一瞬、それにすら満たないぐらいところで金属音がした。微かな鋼が擦れる音、それを聞いた沙樹は血相を変えて翼に話しかけた。

「おい、翼。」

「黙れッ！貴様の言い訳など聞きたくない！」

駄目だこれ、この剣完全に我を見失つてる。ここで退避してもいいのだが騎士と翼の間に沙樹がいる以上、ここで避ければ翼が斬られるかも知れない。ならばダメーシ覚悟と言わんばかりに沙樹は翼に背を向けると、騎士の方に向けて両手で鉄棍を構えた。

そして

「なっ!!?！」

「やっぱりだよクソが！」

ガシャンツ、と大きな音を立てて騎士が飛び掛かってきた。それもこれ以上ない程大きく剣を振り上げて。

「つづうおおお!!?！」

翼の攻撃を受けてる最中に、いきなり背中を向けたことで刀傷が出来るが、気合いで耐えると騎士の剣を鉄棍で防いだ。

しかし、いくらアームドギアと言っても所詮は鉄の棒。硬い鋼の鎧を叩いたことや、何度も騎士や翼の剣を防いだことから、鉄棍には限界が来ていた。

詰まるところ鉄棍は耐えられなかったのだ。騎士の一撃は鉄棍を叩き斬ると、そのままの勢いで沙樹の体を切り裂いた。

どぼっ、と鮮血が溢れ出る。騎士の剣はギアインナーすら切っており、肩から血が溢れ、そこから脇腹にかけてかけて深く大きな傷が出来ていた。

「つぐううううああああああ!!?」

沙樹は半ばヤケクソで両手の鉄棍を騎士に投げるように叩き込んだ。しかしタワーシールドで防がれ、そのままシールドバツシュをくらってたたたらを踏んだ。その上、騎士は剣を突き出そうとするが、沙樹は両手で剣の先端を掴んで無理矢理止めた。

そのまま膠着状態が数秒続いた後に、騎士は沙樹が掴んだままの剣を乱雑に振り回し始めた。手に力を入れていた沙樹はそれに対応出来ず、騎士から見て左の方向へと投げられてしまった。

投げられた沙樹は店のショーウィンドウに突っ込んで、ガラスを散らしながら赤い水溜りを作った。

「いってえ……………」

ググツと上半身だけ起こすと、自然と口からそんな言葉が溢れた。前のあの山で戦った黒い騎士と比べたら、まだまだ痛みなどは無いが結構な血が出ているようで、目がチカチカした。

視線の先では騎士と翼が戦っていた。正直、翼が押され気味で殆ど受けにまわっていたから、何となく負けそうだなと思いつつ見ている。目の前に黒服の男と隊員が駆け寄って来た。

しかし、どうやら心配して来てくれた訳ではないらしい。その証拠に黒服も隊員も銃口をこっちに向けていた。

「手をあげて大人しくしろ!!?」

「何?なんで?」

「おい、あまり無駄口を叩くな!!?お前は特異災害機動部二課より捕縛命令が出されている。着いてこい。」

こいつまじか、今それ言う状況か。とは口に出さなかったが兜の中であんぐりと口を開けてしまった。戦闘放棄してついて来いと？正直あの騎士をここで放置するのはまずい。ここで退いてしまったら騎士は追いかけてくるだろう、それも周りに被害を出しながら。

「断る。」

「何だと？」

「断るつつつってんだよ。アレは多分どこまでも追いかけてくるタイプの敵だぜ？だったら、ここでぶっ潰すしかねえだろ。」

「政府からの命令に逆らうと言うのか？」

「あーはいはい。御託はいいからさっさとどいてくれや。」

沙樹が立ち上がって、シツシツと追い払うようなジェスチャーをすると、隊員はこめかみに青筋を立てながら震える声で言った。

「フン、わざわざ貴様なんぞが出なくても装者さえいれば十分だ。」

そう言った刹那、青い何かが店の中へ激突して盛大に商品棚が倒れていった。そして出来上がった商品棚の山の下には、翼が頭から血を流しながら動かなくなっていた。

翼がやられたのを見てから、隊員の顔を見ると翼の髪の色に引けを取らないほど顔を青くしていた。

「……………んで、装者がなんだって？」

「馬鹿な、そんな……………」

沙樹は、口をパクパクさせながら呆然としている隊員の横を通り過ぎたところで、足に何か当たる感触がした。下を向くと、そこにはアサルトライフルが落ちており、それを緩慢な動きで拾うと、黒い銃身に赤い筋が入った。

ゆったりとした動作で歩いていく。正直、騎士の一撃を受けた時点でかなりの血が出ており、今は何とか気力と脳内麻薬で動いているような状況だった。

「(こっからは、時間との勝負だ。)」

アサルトライフルを腰だめに構えて引き金を引くと、弾が幾つもばら撒かれていく。それを見た騎士は、咄嗟にタワーシールドを構えた。

普通ならば、弾丸はタワーシールドにかすり傷をつけてどこかへ飛んでいくだろう。しかし、彼女の手にしたアサルトライフルは既に『騎士は徒手にて死せず』によって強化されていた。

そして、強化されたアサルトライフルによって発射された弾丸は

盾どころか、騎士も貫通した。

タワーシールドに次々と穴が開き、その後ろにいた騎士の鎧、肉体も貫通した。

やがて数秒ほど撃ち続けて、弾切れになった所で沙樹はアサルトライフルを後方に投げ捨てた。その際に、さっきの隊員の情けない声が聞こえた気がするが、彼女にとってはどうでもいいこと。

騎士は、水玉模様の穴が開いたタワーシールドはもう使い物にならないと判断したのかその場に落とすと、剣を右手で構えた。タワーシールドを持っていた左手は、アサルトライフルの影響か穴だらけになつており、素人目で見ても使い物にならなくなっていた。

「いいぜ、お互い本気で行こうや。」

沙樹がそう呟くと、右手には光が集まって無骨な大剣が生成されていた。それを両手で構えると、騎士と沙樹はほぼ同じタイミングで駆け出した。

勝負は一瞬。二人はこの一撃に賭けていた。両方とも体力は限界で極限な状態。だからこそ己の最高の一撃を繰り出さんとしていた。騎士が剣を突き出した。今まで放つたどの突きよりも速く、全体重を掛けた前傾姿勢の正に本気の一撃。それは的確に沙樹の頭部を狙っていた。

沙樹は騎士が突くと同時に思いつき踏み込み、大剣を左下に持つて来ると右上へと振り上げた。そしてダメ押しで失血で眩みそうになる意識に気合を入れて全身に力込めて叫んだ。

「破ッ!!」

そして、互いの剣が鎧に触れた。

翼が戦闘不能になった事で、現場に急行した風鳴弦十郎はそれに目を奪われた。

鋼の騎士と黒い騎士が全力で斬り合っていた。いや、斬りあつたというよりはある一種の試合をしているようにも見えた。

鋼の騎士による突きを、黒い騎士は僅かに首を逸らす事で兜に掠らせて、カウンターのよう到大剣を振り上げて鋼の騎士の腕を切り飛ばした。

鎧ごと斬り飛ばした、なんて信じられない光景だったが、目の前の床に刺さった鋼の手甲に握られたままの剣が、それを現実だと思いついて知らせていた。

「彼女は………一体………？」

鋼の騎士にトドメの大剣を振り下ろした黒い騎士に、弦十郎はそう言葉を漏らした。

やがて、こつちに気づいた黒い騎士の兜の中から、紅の光が見えていた。

立ってるのもきついけど、なんとか耐えています。

大剣を床に刺すとふうっ、と息をついた。

目の前には、兜が割れた右腕の無い鋼の騎士がどす黒い血を垂れ流しながら倒れていた。

血以外にも真っ黒な塵、と言うよりは霧のような瘴気のようなものが騎士の体から漏れ出し、天に昇るように消えていった。それに伴って騎士の鎧や盾も黒い霧に変換されていき、消えていった。それを見た沙樹はある事に気付いた。

「(人じゃない……?)」

そう、明らかに人ではなくてノイズでもないような変な消え方をしていた。それに騎士には位相差障壁と言われる、ノイズ特有の性質が無い事にも疑問を感じた。

あの山での黒い騎士と戦った時、騎士の大剣には血がついていた。つまり、位相差障壁によって塵にしたのではなく、騎士の剣によってそのまま屠られたのだろう。位相差障壁を持たない埒外の存在、だとしたらまさか

聖遺物の一種？

と、ここまで考えたところで視界が二重、三重とブレた。そして足の力が急に抜けて片膝をついてしまい、床に刺さった大剣の柄を杖代わりに掴んだ。

どうやら血を流しすぎたらしい。胸元を触ってみると、血は殆ど止まっているようだが、それでも少しづつ血は流れていつている。

病院行った方がいいかな、いや、二課にはれるな。と考えながら何とか立ち上がった。すると、後ろから厳つい男の声がした。

「彼女は……… 一体………？」

「アア………？」

いきなりの言葉につい変な反応をしてしまう。誰か確認しよう

して振り向くと、そこには聖遺物疑惑のある二課の司令こと、風鳴弦十郎がいた。

弦十郎はこちらを見据えると、ゆっくりと歩き出して来た。そして、畳二つ分ぐらいの距離で止まると口を開いた。

「君は、何故戦うんだ？」

「何故、だと？」

「ああ、君がああ騎士と戦う理由を知りたい。」

何故戦うのか。それを聞かれて原作云々に出てこない騎士について話しても、はいそうですかとは信じられないだろう。ましてや、二課にはまだ一期ラスボスがいるからこの話をしたせいで計画の変更になつたらまずい。

ならば、この際だから翼みたいに適当にぼかして伝えて、適当な理由付けて拒否しよう。翼よりはまだ話も聞いてくれそうだし大丈夫だろう。

「不要だから。」

「何？」

「なあ、質問を質問で返すように悪いが、ゴミをどう思う？そこら辺にあるような糸くずや埃とかだ。」

「それは……………捨てるが……………？」

「そうだよなあ、それだよそれ。この世に存在する不用品は消滅あるのみだ。」

「随分と、横暴な自論だな……………。」

「ハハハ、耳が痛いね。だがいずれゴミも積もれば邪魔になる。ゴミを捨てるのはいつか誰かがやらなければいけないものだ。それともなんだ、お前達がやってくれるのか？この無能共の集まりで？」

今の発言に一課の連中も頭に来たのか殺気の籠った目を沙樹にぶつけて来る。しかし、彼女は大きな金属音を立てながら床に刺さった大剣を抜いて肩に担ぐと、周りの視線も一気に散り散りになった。

「まあ、そういう事だ。あと、俺はお前達のような組織には属する事はないと思え。どうせアレだろ、そっちに所属でもしろって言うんだろ？」

「むっ、それはそうだが……しかし、その力は個人で所有している物ではない。それにどんなリスクがあるか分からないんだ。だから」「しつこいぞ。大体、所属したところであの一流アーティスト様に背中から斬られるなんて事にはなりたく無いんでね。」

その言葉を聞いた弦十郎は、少し思うところがあつたようで声が詰まってしまった、視線を下に下げた。

沙樹は弦十郎に背を向けて、大剣を肩に担いだまま外に出ようとしたところで、あつ、と一言漏らして弦十郎の方へ振り向いた。これは一応聞いておいた方が良さだろう。

「そうだ、お前の名前は？」

「……俺は特異災害対策機動部二課の司令をやっている、風鳴弦十郎だ。」

「弦十郎、ね。覚えておく。ああ、それと司令なら部下の教育と掃除はやっておきな。」

「掃除？ 一体何を」

「それじゃ、またいつか。」

沙樹は弦十郎の言葉を遮ると、黒い霧を出してレーダーに発見されないようにして走り出した。弦十郎とはもう少し話していたいが、もうそろそろ失血で倒れそうなのだ。さらに怪我は前だけでなく背中も翼に切られたから多少の血が出ている。

ショッピングモールから出てその近くの裏路地に駆け込む。このまま家に帰ったとしてもじいちゃんばあちゃんに病院に連れて行かれ、病院経由で二課へと連絡が行くかもしれない。ならばここで一旦休みながら適当に傷の理由でも考えよう。

ふらふらと歩いていると、近くに座れそうなほどの廃材を見つけた。それに腰掛けてギアを解除すると黒い霧が晴れていき、次の瞬間には制服に戻っていた。

言い訳どうすつかなー、とかいつそ隠して帰ろうかなー、とか考えていたら、体に限界が来たのか瞼が自重落下してしまい、意識もすぐに暗闇へと落ちていった。

「全く…………… 無茶をする子ねえ。でも、なんて美しいのかしら。」

「…………… んあ？」

瞼を開くと日は沈んでおり、真つ暗な裏路地が更に一層暗くなっていた。腰掛けたままの体勢で寝ていたからか、全身ががちりと接着剤でなられたかのように凝り固まっていた。

ぐつと立ち上がって背を伸ばしながらほぐしていると、ある事に気づいた。そう、体が普通に動く事だ。視界のブレや体の力が抜けそうになったりする事がなかった。とうか寧ろ体が軽い。

疑問に思っ、制服の胸元から自分の体を覗いてみると傷が殆ど治っており、うっすらと傷痕が出来ている程度だった。

「誰かが…………… !!？」

その場で周りを見渡してみても何も無い。強いて言うならカラスが一匹いるだけで、相変わらず人気の無い裏路地が存在するだけだった。

まあ、また二課に会った時にちよつと聞いてみるか。なんて事を思いつつ家に向けて歩き出した。ふと携帯を開いてみると、ばあちゃんからのメールが入っており、『早く帰って来なさい』の件名を見て溜息をついた。多分説教かなあ、と呟くと早歩きで裏路地を抜けた。

やがてそれを見届けた赤目の鴉は、月を背に飛び立っていった。

むう、と椅子の背もたれに寄りかかりながら深い溜息を吐いた。

今日の一件で出会った、黒い騎士。それが弦十郎の頭を悩ませる種

だった。

前々から存在自体は確認せども、確認に行く度に姿を消し、いざ目の前に姿を現したと思ったら、よく分からない事を言われて結局何も分からないまま消えていった。これ程までに話のしようが無い人は、弦十郎も初めてだった。

「どうしたら……」

「例の騎士？」

後ろのドアが開いて了子が入って来る。目の下に少しだけ隈ができており、半分閉じそうになっているのを見て弦十郎は少し気を緩ませた。

「ああ。こちらが話し合いをしようにもあまり応じてくれなくてな。どうしたものかと考えていたのだが……。そっちはどうだ？何か分かったか？」

「全然よ、アウフヴァツヘン波形も相変わらず不定形だし、かと思ったら、あの騎士のエネルギー出力は翼ちゃんのを超えていたわ。」

「翼のギア出力を？」

「ええ、それこそあの騎士が本気を出したら、絶唱以上の威力が出るかもしれないわね。」

「それ程までの力が……」

「あるみたいね。少なくとも予想だけど。」

了子はそう言うと、近くの自販機にコインを入れて紅茶のボタンを押した。コポコポと液体の流れる音を聞きながら待っていると、不意に了子が口を開いた。

「でも、分かった事もあったわよ。あの鋼の巨大な騎士の方だけど」

「本当か？」

「勿論よ。あの鋼の騎士、どうやらノイズでもないし人でもないみたい。」

「となると、聖遺物か？」

「いえ、聖遺物でも無いわ。全く未知の存在よ。」

了子は自販機から出てきた紅茶のカップを手にとると、口をつけて啜る。体の内を流れるひんやりとした紅茶がとても気持ちよかった。

「あの鋼の騎士から僅かに残った黒い体液と、鎧の破片を調べてみたのだけれど、鎧に関してはただの鋼。液体の方はこの世に存在しない物質よ。」

もしくはまだ見つかってないだけかもしれないけど、と付け足すともう一度紅茶を啜った。

「存在しない物質、か……………」

「そうね、本当に厄介なこと極まりないわね。」

二人で頭を抱えていると、弦十郎がよしつと言いながら席を立った。そして、首をコキコキと鳴らすと扉から出ようとした。

「あら、どこに行くの？」

「翼の様子を見てくる。あとついでに気分転換がてら体も動かしてくる。」

「分かったわ。こつちももうちよつと調べてみるから、何かあったら連絡するわ。」

「分かった。無理するんじゃないぞ？」

「勿論よ、肌はきにしてるもの。」

二人でハハハ、と笑うと弦十郎は扉から出ていき了子一人だけがその場に残された。

紅茶を一気に呷ると、ゴミ箱にカップを投げ入れて顎に手をやり考える。今回の件、不明な存在の出現、未知の物体、黒い騎士の『不用品』に『掃除』。

「まさか、私の事が知られている？」

了子は黄金色に輝く目を光らせながら呟いた。その姿は一人の考古学者ではなく、終焉の名を持つ巫女としてのものだった。

「計画を変更するか？いや、もう少し様子を見るか……………」

ひっそりと呟くと、了子の目は元通りになり研究室へと歩き始めた。

真つ白な病室で俯く一人の防人の姿があった。いや、それは防人というよりも、今はただの少女だった。

思い出されるのは今日の戦闘。例のアンノウンがようやく姿を現したと思ったら、未知の敵を一人で鎮圧してしまったのだ。

それを見て『もしも』が翼の中で芽生えた。もしあの時アンノウンがいたら、もし三人で戦えてれば。そんな思いが爆発し、鎮圧し終えたばかりのアンノウンに斬りかかった。

その結果が、これだ。鋼の騎士に奇襲をかけられ、アンノウンの足を引つ張ってしまい、拳句に自分も軽々と吹き飛ばされた。

でも、何よりも、アンノウンに守られた。それが翼の中ではとてつもなく不甲斐ないと感じた。あの場でアンノウンは鋼の騎士の奇襲に気付いてた。だから自分に声を掛けた。

「それを、私は !!?」

あろう事が問答無用で斬りかかった。だからやむを得ずアンノウンは、私と騎士の両方から斬られることとなった。

「不甲斐ない……………」

ベッドの上で体を縮こませていく。心の中でアンノウンへの恨みのような物と、自分の不甲斐なさにアンノウンへの後悔がせめぎ合うように混ざりあっている。

こんな時、かつての相棒がいたらなんと言っただろう? そんな事を考えながら翼はもう一度瞼を閉じた。

そして、舞台は完成する。

「響、忘れ物は無いかい?」

「うんッ! バツチリだよ、沙樹!」

「ならよかった。初日から忘れ物なんてすると、先生に目を付けられるからね。」

「ええッ!? それはやだなあ……………」

「そうでしょ? ほら、じゃあ行こっか!」

乱入者ありのツギハギの舞台が。

その結末はどうなるか。

それは、神すら知らない。

幕間、もしくははメモリア。

・響専用セコム『サキ』

「ひうつ、やめて！」

「うるさいわね！あんたさえいなければ！」

響の通う中学校の校舎裏にて今日も今日とていじめが行われていた。理由は簡単、ライブで生き残ったから。

お前が生きて何で将来有望な先輩が死んだんだ。お前が先輩を踏んで逃げたんだろ。そんな罵詈雑言という名の勝手な推測によって殴る蹴るや私物に落書きされるなど、そういった行為は日常的だった。

「大体、あんたは何で生き延びてヘラヘラ笑ってんの！？他の死んだ人に申し訳ないと思わないの？」

「ぐうつ！や、やめて……………」

「このっ……………！！？」

そして、少女が手を振り上げた時だった、そいつはやって来た。

「ファイナルアタックライドオオオオオ！！？」

「……………」

そいつは綺麗なフォームでダッシュしながら、手を振り上げた女に近づくと思いつき叫びながらドロップキックをかました。

「ディメンションキイイック！！？」

「……………」

彼女の名は、方波見沙樹。後の渾名を『響専用セコム』と呼ばれる少女兼装者モドキである。

ぶっ飛ばされてノックアウトされてしまった少女の代わりに、取り巻きの少女が沙樹に吠えた。

「な、何すんのよ…こいつが何やったか分かってんの！？？」

「ああ！分かってるとも！そいつはなあ！ライブで命がけで逃げ延び

ただけの女だ！それが何か悪いのかア!?？」

「悪いわよ！何でこいつが生き延びて、先輩が死ななくちゃ」

「知るかアアアアア!!? バーニングデイバイドオオ!!?」

「ぐぼお！」

取り巻きがうるさかったので、取り敢えずいつもノックアウトさせるのと、別の取り巻きに目を向けた。すると恐れを成したのか、青ざめながら逃げていった。

そして沙樹は、一仕事終えたと言わんばかりに汗を拭うと響に向き直って手を差し伸べた。

「大丈夫だった？響。」

「う、うん大丈夫だったけど……………」

「いやー助けに行こうと思ったら変な男共に囲まれちゃって。片っ端から殴ってたら助けるのが遅れちゃった！ごめん！」

「それは、良いんだけど…………… ちよつと、やりすぎじゃ……………?」

「そうかな？でもね、響。響はもつと堂々としていてもいいと思う。」

「そ、そうなのかなあ……………」

「そうだよ！だって響は何も悪くないんだから！だからあんな言い掛かりを真に受けなくたっていいんだよ！」

「それは、でも」

「ほら、ごちやごちや言うよりも、今日はふらわーに行こう！旨い物食べて頭スッキリさせれば何とかなるって！」

「…………… うんッ！」

そのまま2人は、笑い合いながら学校を後にした。これは、そんな仲のいい少女達のちよつとした日常。

因みに後日、沙樹は先生に叱られたらしい。

・守る為に。

「オオオラアッ！どけエッ！」

大きな声と共に黒い塵が大量に舞っていく。あの鋼の騎士の日以来、沙樹は出てくるノイズを皆殺しにしていた。

理由は簡単、今は亡き装者の奏の代わりと翼のメンタルが安定するまでは、取り敢えず戦力は多いに越した事は無いだろうという考えだった。

まあ実際は、沙樹のギア擬きの研究と対ノイズ戦闘の訓練を兼ねてやる為に来てるといなのが本音だが。

「せいッ！だらあああッ！」

そんな彼女は今、右手に鉄棍、そしてもう片方の手には、2 m程の曲がりくねったガードレールが握られており、その二双によってノイズは片っ端から消えていつていた。

「リアストオー！」

そして残り少なくなってきた時、沙樹はガードレールを投げると回転しながらノイズを切り裂き、やがて自販機に刺さって止まった。

「フウツ………すう、はあ……。」

深く呼吸しながら辺りを見渡すと、塵がそこら中に散らばっており、一部は風に吹かれて何処かへ飛んでいった。

「まだ、原作に出てこない敵が来るかもしれない。ならもつと、強く、ならなくちやなあ。」

ポロツと溢れた独り言は、塵と共に虚空へと消えていった。

設定、それも原作前の物。

・方波見 沙樹

リディアン女学院所属

身長 165cm

体重 データ不明

スリーサイズ 不明

リディアン女学院に通うイカれ女。頭のネジがいつの間にか外れており、やばそうな怪我も気合と根性で何とかする。

原作が好きだったが、自分が存在することにより色々な差異が発生してるのではないかと思ってる。アニメ本編やゲーム本編に存在しなさそうな敵は、皆殺しにする。

響や原作キャラと一緒にいると活発そうな口調だが、ギア擬きを纏って本性が現れると一気に口が悪くなり粗暴になる。

原作前は、響を庇う為にいじめっ子に対して拳で抵抗した。なんなら足も出た。響を庇い続けたお陰で、ドロップキックとデンプシーロールが得意になった。

因みに、よつぽど過剰に危害を加えようとした者には、ギア擬きによる実力行使に出た。結果はお察し。

・使用ギア『アロンドイト(仮称)』

沙樹のギア擬きが、FGOのランスロットの能力に似ていたことから仮称されたギア。通常のギアのように機械的に変形せず、霧や光などの粒子状の物が沢山出てくる。

あと聖遺物が何処にあるか、もしくは埋まってるかまだ確認出来ない。

・見たい目

頭がFGOのバサスロットの兜

胴体が、マシユの初期段階の鎧

手足が肘と膝から先が、バサスロットの鎧

大体はそんなイメージです。

・うなじのコード

うなじから生えてくるコード。武器や物に刺して自分専用の武器にする。あまり使われてない。沙樹専用になると、ノイズに効いたり威力の強化がされる。因みにノイズも刺したり叩いたりできる。

・アームドギア

いずれも、特に変形などはしないが、筋力とギアのアシストなどで斬ったり殴ったりすることが多い。

・厚めの大剣

何の変哲もない厚い大剣。頑丈で鋭い、強い。しかも結構重い為、重量をかけて斬ると硬い敵もスッパリ割れる。イメージはベルセルクのだんびら。

・鉄棍

ただの鉄の棒。敵を殴って突いて色々使える。耐久性はそこそこ。長時間使っているとやがて折れる。

・能力

『騎士は徒手にて死せず』

色んな物を沙樹専用の武器にする。威力の強化や、ノイズに対抗出来たりする。また、アームドギアの威力強化も出来る。

『己が栄光の為ではなく』

黒い霧を発生させ、姿を何重にもブレさせて姿を確認できないようにする。これはレーダーなどの電子機器も欺く事が可能。

・原作キャラ

・立花響

我らが原作主人公。沙樹の作る唐揚げにホクホク顔。

・小日向未来

引越しちゃった響の幼馴染。かなり遠くなので電車とかで会いに行く事が出来ない。しょんぼりしてる。

・風鳴翼

剣。メンタルボロボロでふにやふにやの状態。治るといいね。

・天羽奏

ライブで自爆した人。死ぬ前に、後輩が出来るかもとワクワクしていた。しかし、顔を見ることは無かった。

・風鳴弦十郎

最強のOTONA。もうあいつ一人でいいんじゃないか？因みに、アンノウンこと沙樹とは、どうにかして交渉しようと思ってる。

・櫻井了子

その名をサークライ。または聖遺物の研究してる人。BBAとか言ったら聖遺物の破片が飛んでくる。あとなんか企んでる。

・二課の皆さん

アットホームな職場です。アンノウンの戦闘データを見て、なんだコイツ!? ってなった。

・一課の皆さん

ちよつと対応を間違えれば沙樹に皆殺しにされてた人たち。あの場で全員で銃を撃つたりしてたら危なかった。

・原作に出てこないキャラ

・黒騎士

黒い大剣と黒い盾と黒い鎧を身に纏った騎士。パリイが得意。沙樹にダメージを与えるも、反撃をくらって死んだ。モチーフはダクソの黒騎士。

・鋼の騎士

くすんだ鋼の鎧に分厚い剣、タワーシールドを手に持った騎士。沙樹と戦ってダメージを与えるも、銃で撃たれた挙句に沙樹の大剣で斬られた。モチーフはダクソのエレミアス絵画世界にいるバーニス騎士。

・???

デー たガあ りま せん。

・ちよつとしたあとがきみたいなやつ

これにて原作前は終了です。取り敢えず、自分が書きたい事を滅茶苦茶に詰め込んだのがこの小説でしたが、意外と人気になって嬉しいです。これからも頑張ります。

さて、これから沙樹はどうなるのか、物語はどんな展開になるのか、楽しんでいただけたらなと思います。では。

流転と皇帝の無印

原作って、何日に始まるっけ？

やべえ、何日だっけ。と思う今日このごろ。

「ツスー、いつだっけなあ……………」

どうすっかな、と頭をポリポリ掻きながら呟くと窓の外を眺めるのは、装者擬きの少女こと、方波見沙樹。

「(最近、ノイズも増えてきたけどなあ、これも原作が近づいてるって事なのかな?)」

そのまま、くあつと小さな欠伸をするとシャーペンをクルクルと回し始めた。

4月、それは出会いと別れの季節。今年にリディアン女学院に入学した響と沙樹は、晴れてリディアンの生徒として青春を謳歌する権利を得たのだった。

正直、沙樹は最初に響が仲良くなれるか不安だったが、今では原作通りの友達とも仲良くなれていたみたいで、よかったと胸を撫で下ろしたのがつい最近のこと。

ただなあ……………」

「響、遅いな……………もう二時限目だぞ……………?」

彼女、想像以上に人助けの癖がすごい。原作通りのペースで人助けしてるのだろう。それにしても些か多すぎやしないだろうか。最低でも一週間に一回は遅刻する。理由は勿論、人助け。

「やっぱ多いよな……………」

「何が多いのですか?」

「ああいや、響ってなんで遅刻が、おお、い……………」

沙樹は、窓の外を眺めながら物思いに耽っていたせいか、目の前に先生が来ていた事に気が付かなかった。

先生はいかにも怒ってないような顔をしているが、目が笑ってな

かった。よく見たら目がピクピク動いてるし多分かなりキレてるなこれ。

額にうつすらと汗が出るが、何とか笑顔を取り繕いながら先生の方へ顔を向けた。そして、弁明の為に口を開いた。

「ハハハ……えーと、そんな怖そうな顔しないでください……」
「ホラ、婚期、逃す……」

「方波見さんッ！」

「すいませんでしたッ!!？」

速攻で腰を90度直角に折った。やっぱりアニメよりも実物で見ると迫力が違う。この人もOTONAの一種なのだろうか。

「まったく、まあまだ入学した直後でしょう、そうやって考え事するのはわかります。ですが！その減らず口は治しなさい！」

「はいっ！分かりました！」

クラスメイトは、腰を直角に曲げたまま謝る沙樹を見て、クスクスと笑っていた。中には少し心配してるような声もあったが、あんまり気にしない……おい待て板場ア！『確かに』じゃねえぞお前！そんな減らず口言わねえんだよ俺は！

先生が教壇に戻り黒板に向いてチョークを手に持った瞬間、教室のドアが音を立てずに開いた。

「よーし、バレてないバレてない……」

そしてひよっこりと茶色のショートヘアを揺らしながら響が入ってきた。

「やつと来たの？ほら早くこっちに。」

「いやー、また人助けしてたら遅くなっちゃってさ。」

手招きして響に早く座らせようとすると、響は困ったように笑いながらそそくさと音を立てずに隣に座った。響はどこで被ったのか制服に木の葉と少しの泥がついていた。

因みに、座席の位置は原作とほぼ同じで沙樹は未来の場所に座っている。

沙樹はコソコソと小さな声で響に話しかけた。

「また人助け？その精神はいいんだけど程々にしないと痛い目見るよ

？」

「そうなんだけど……………その、勝手に体が動いて……………」
「えへへへ。」

「まったく……………ん？」

ふと響のスクールバッグを見ると少しだけうねっているように見えた。とうかなんかすごいベコベコとうねってる。しかもバッグもなんかガタガタ動いてないかアレ。

「響、そのバッグは？」

「え、いやその、ちよつと訳がありまして……………」

頬を掻きながら視線を泳がせる響。

これ絶対なんか入ってるって、ほらもう動きがさつきよりもドタバタいってるんだけど。

「正直に言つて、響。あの中身なに？」

「えーと、その……………それは」

「ニヤーン」

「え？」

「あつ」

突如可愛らしい鳴き声がして教室が一瞬で静まり返った。沙樹は速攻で俯いて教科書を読むふりをして、関係ないアピールをし始めた。響は大量の脂汗をかき、目は平泳ぎを始めた。

そして、ゆつくりとチョークを置いて振り向いた先生は、仏のような笑みを浮かべながらもその瞳の奥に鬼を宿していた。

「立花さん？こんにちは、いつ来たのですか？」

「こ、こんにちは！えーつと、さつき来ました！あはは……………」

「それで、今の鳴き声はなんでしょうか？」

「なんのことか、ちよつと……………」

「分かりました。ではその激しく動いているバッグはなんでしょうか？」

「……………」

響は、そつとバッグを机の上に置くのとゆつくりとジッパーを開いた。すると中から子猫が顔を出して、そのまま体も出して机の上に移

動すると、毛繕いを始めた。

『……………』

その様子に教室全体が無言になる。先生は鬼から阿修羅へ進化しており、響は顔を真っ青にして脂汗の量を増やした。沙樹は全力で影を薄くした。

やがて、先生が口を開いた。

「立花さん？」

「ハッハイ！」

「何か言うことは？」

「あああの、この猫が木の上で降りれなさそうにしてて！」

「……………それで？」

「お腹を空かせてるんじゃないかと……………」

「ああもう立花さんッ！猫は用務員さんに預けてきますからあなたは席に座ってなさいッ！」

「す、すみませ〜んッ！」

沙樹は俯いたまま、ため息を溢してもう一度窓の外を見た。

今日はよく晴れた快晴だ。

夕焼けが部屋に影を作る頃。響と同室の沙樹はゆったりと寛いでおり、スマホで記事を読む沙樹の肩に響がもたれかかってきた。

「いやー、今日は色々ありすぎてクライマックスが100連発気分だよ。私って呪われてるかも。」

「響のドジと人助け、今日も凄かったね。まあ、先生に怒られたのは自業自得だね。」

「まあね！人助けは私の趣味だからね！」

「なんでそんな誇らしそうなのさ……………大体ね、同じクラスメイトに教科書貸す？度が過ぎてないかい？」

「私は沙樹から見せてもらうからいいんだよ。同じ病院で会った仲間だしさ〜。」

「ハア…… まったく。」

「なんだか呆れてきて、またスマホに目を向けるとあるニュースの見出しが大きく映った。」

『風鳴翼、ニューアルバム発売！』

何処かぎこちない笑みを浮かべながら、煌びやかな衣装を身に纏った翼の写真と共にCDの曲のリストが書かれていた。

最近、翼の写真などを見るとちよつと億劫な気持ちになってきた。理由としては、会うたびに二課に來いと言われ、拒否したら斬りかかってくる。

まあ実際それが義務だろうし、拒否したら無理にでも連れてこようとするのはまだ分かるのだが、最近だと捕まえる前に殺しに來てる。この間はノイズを一掃した後横からいきなり斬ろうとして來た。因みにその時は鉄棍で殴り飛ばした。

そんな事もあり、どうも苦手なのだ。下手すれば今度見つけれたら背中から斬られるかもしれない。そう考えたら身震いがした。

記事に顔を顰めていると、響が身を乗り出して沙樹のスマホを覗いた。

「あつ、それ翼さんのCD発売の!?? 格好いいなあ、しかも特典付き!?? って沙樹、すごい顔してるよ?」

「ん、ああ。いや、ちよつと思ひ出し恐怖をね……………」

「なにそれ!?? 翼さんと何かあったの!??」

「別に無いよ? ただ背中から刺される位には恨みがあるだけで……………」

「本当に何かあったの!??」

「まあそれはともかく。」

「ともかくじや無いよ!??」

「響もすごいよね、翼さんのことすごい好きじゃん。てか翼さん目当てでリディアンに進学するって言ってたよね。」

「でもまだ一度も会えて無いんだよね。トップアーティストだし簡単に会えるとは思ってないけどさ。」

「その内会えるんじゃない? チャンスはあるさ。」

「ありがとう、沙樹。あく早く会ってみたいなあ。」

「会えるといいねえ…………… ツと、やばい、そろそろバイトだ。行ってくるよ。」

「あ、そろそろ？いつてらっしやい！沙樹！」

「うん、行つてきます。響。あ、夜は向こうで賄い食べてくるからそっちで食べててね。」

「は〜い〜！」

そう言つて沙樹はドアを開けるとバイト先へと駆け出して行つた。ごく僅かに、沙樹の体からは黒い霧がうつすらと出ていた。

月が登つた頃。木に囲まれた所で大量の弾丸が飛び交つていた。

「撃てッ！」

「弾が当たらないッ!??これも位相差障壁とでもいうのかッ!??」

自衛隊員がアサルトライフルを構え弾を放つが、ノイズからすればゴミですらない。ノイズに当たつた弾はすり抜け、何処かへと飛んでいく。このままではやられる。そう思った時、ダンッ、と後ろから音がした。

各隊員も驚いて、銃撃をやめて後ろを振り向いた。するとそこには、『何重にもブレた黒いナニカ』が装甲車の上に立っていた。

「あ、あれは」

「ノイズか!??」

「いや、違う！『アンノウン』だッ!!?銃を向けるな!!?」

比較的新しい隊員は銃を構え、以前から『アンノウン』を知る隊員

は銃を下げるように指示した。

「aaaaarrrrrrrrrrrrrrrrrrrr!!」

突如、アンノウンが吼えるとうなじの辺りからコードが生えてきて、近くの隊員のアサルトライフルや装甲車などに突き刺した。さらに、近くにあった装甲車のミサイルポッドを無理矢理引きちぎった。

「なにを!?!」

そして、奪ったアサルトライフルのストックを脇に挟み、ミサイルポッドを肩に担いでノイズの前に仁王立ちになると、叫んだ。

「ssssiiiiiiiiinnnnnnneeeee!!」

それは合図。ノイズの処刑と一斉掃射を示した獣のような咆哮だった。

アンノウンの手にした火器はさつきとはまるで違い、ノイズを瞬く間に塵へと変えていく。中には恐怖のせいか足を止めるのも居たが、アンノウンには知ったこっちゃない。皆殺しあるのみだ。

やがて、全弾撃ち尽くすとその場に火器を乱雑に置いてアンノウンは近くの雑木林に駆け込んだ。

そして入れ替わるようにバイクの音と共に青髪の少女が飛び込んできた。

「状況は!?!」

「…………… あ、ああ、さつきアンノウンが来てくれて殆どのノイズを倒したんだが…………… まだ生き残りがいる!」

「了解。直ちに倒しますッ!」

そして青髪の装者こと、翼はアームドギアの刀を握りながら駆け出すと同時に、アンノウンに思い馳せた。

「(やはり、アンノウン……………次こそは!!?)」

翌日の昼下がりに、食堂にて沙樹と響は一緒に昼食を食べていた。するとスマホを見ていた響が驚いたように小さな声を上げた。

「あ、沙樹、昨日この近くでノイズが出たんだって！それで『黒騎士』が助けたらしいよ！」

「本当？なら気をつけないとね。」

まあ俺なんだけどな！という言葉は胸の内に押し留めておく。やっぱり昨日の事はニュースになっており、そこで大々的に『黒騎士』ことギアを纏った俺が映っていた。

ここまで知れ渡ったのはあの鋼の騎士との一件のせいだった。あのショツピングモールで暴れたのが知名度を上げる原因となった。

さらに、他の騎士を探しがてらノイズを倒していたら知らないところで助けられていた一般市民が『真つ黒な騎士が助けてくれた。』と答えたことにより、ノイズに対抗しうる謎の人物としてかなり有名になった。

だが、ここから予想外だったのは何処か途中で二課が情報統制でもするのかと思ったら、なんと派手に脚色しながら俺の存在を広めたのだ。さらに政府も『黒騎士くん政府に出頭して？』みたいな声明を出しやがった。誰が出頭するかボケ。

これからはちよつと出張の控えようかなあ、と考えながら米を口へ運ぶと、ふと気になった事を聞いてみた。

「そういえば響？」

「なに？」

「昨日言ってた翼さんのCD特典って何が入ってるの？」

「特典？確か、本人のサインとブロマイドだったかなあ。」

「サインにブロマイドか。それはいいねえ、売ったら高く売れそう。」

「て、転売！？駄目だよ！？？」

「ハハ、冗談冗談。サキハウソツカナイ。」

「思いつきり嘘つきそうな声だったよ！？？」

二人で冗談を言い合っていると、食堂がザワついてきた。少し大声

で喋り過ぎたかと思ったが違うようだ。じゃあ一体、と周りを見渡すと見覚えのある青い髪が視界に映った。

「みて……風鳴翼よ……。」

「本物だ！」

「芸能人オーラ出まくりで近寄りがたくて……。」

「孤高の歌姫ね……。」

周りの生徒が口々にやんやと騒ぎ立てるが、当の本人は一切気にする様子もなく、歩いていった。

やっぱりこの時期はツンケンしてるなあ、と思っていたらいきなり響が席を離れて翼に駆け寄って行った。しかも口に米粒を付けたまま。

あいつよくあんな格好で行くよなあ。と考えながら見ていたらふと、既視感を覚えた。

そういえば

「あれ、これ原作一話の流れじゃね？」

思わず口に出してしまったが、近くに誰も座ってないようで誰かに聞かれてなくてよかったと一息ついた。

そして、案の定翼に注意された響はさすがとこつちに戻ってきた。

「うう、絶対翼さんに変な子だと思われたよ。」

「まあ間違っていないいいんじゃない？……」 プフツ

「笑わないでよー！あー！私やっぱり呪われてるっ!!？」

沙樹は響のいつもの口癖に軽く笑いながら、薄く目を細めた。

そして同時期。

ヒュルリ、と季節外れの枯れ葉が目の前を通り過ぎた。その様子を廃ビルの屋上で見つめる者が居た。

金属の擦れる音を青空の下に響かせながら、縁のギリギリのところに立ち町行く人々を見据えた。それは、女、少年、大男、老人、様々な人間を品定めするように。

ふと足元に違和感を感じ、見てみるとそこには干からびた人間のよ

うなものが、縋るように足首を掴んでいた。

「……………」

ソレは、無言で剣を抜くと干からびた人間に突き刺した。すると刺された人間は小さく悲鳴を漏らすと、粒子のように溶けていき消え去った。

そして、もう一度ソレは町行く人々を一瞥すると屋上の中心まで歩き、そこに立ち尽くした。

どれくらいか経った頃、逆光になって飛翔してくる物体があった。ソレは物体を確認すると静かに目を閉じて、その時を待った。

目を閉じた刹那、体に浮遊感が襲いかかり上に引つ張られる感覚がした。改めて、目を開いて自身を持ち上げた物体を確認すると、そこにいたのはソレにとっても馴染み深い黒い大きな鴉だった。

鴉はソレの肩に爪を食い込ませながら運んでおり、鴉もソレもいつもの事だと慣れていた。

運ばれている最中、ソレはあるものを見つけた。

茶髪の女子と仲良く話している、黒髪の少女。彼女こそ同胞を二度も退けた新たな強者。或いは、濁流に逆らわんとする異端者。

「 鬘 「通入縛昂≧縛控c縛エ縛?縲」

ソレはフツとまた目を閉じて、揺られる感覚に身を任せた。

始まったけど、やっぱり来る。

「CD、とつくてん♪CD、とつくてん♪」

夕焼けが差し掛かる頃、立花響は小走りになりながらCD屋を目指していた。目当ては勿論、風鳴翼のニューアルバム、それと特典。

ひたすらCD特典と口にしながら走り続け、あとCD屋までもう少しのところまで響は異変に気づいた。

ひしゃげたポールや割れた窓ガラス。そして周りには黒い塵。

「(なにこれ……………炭素?)」

黒く、あちこちに存在している塵を見て、いつかの光景がフラッシュバックする。逃げ惑う人々、胸に刺さった破片。散り散りになる歌姫。そこまで見たところで、少し先の曲がり角から異形が現れた。
「……………ノイズ!!?」

慌てて逃げようとしたところで、響の耳に少女の啜り泣く声が聞こえた。声が出た方向を見ると、ゆっくりとノイズに迫られている少女が見えた。

「危ないッー」

その状況を見た響は、全速力で走ると間一髪で少女を抱き抱えて、ノイズから逃走を始めた。

そして、ノイズ達も獲物を取られたのか、もしくは獲物が増えたと思ったのか追いかけてきた。

「ママ……………どこ?」

「ッ!?」

少女のその一言で響が顔を顰めた。だが、できる限り微笑みながら安心させる為に声をかけた。

「大丈夫。ノイズがいなくなったら一緒に探そう!」

「ほんと?」

「本当だよ、だからまずは一緒に逃げよう!」

響は少女を抱えたまま走り出した。後ろからノイズがあつちこつ

ちから襲いかかってくるがそれも何とか避ける。

幾分か走っていると息が切れてきた。流石に子供一人を抱えながら全力疾走はキツかったようだ。そして、それを見かねた少女は心配そうに声をかけた。

「大丈夫？お姉ちゃん？」

「大丈夫ッ！へいきへつきゃらッ！！？」

響は即答で叫びながら路地を曲がり、さらにスピードを上げて塵の舞う街を走り抜けた。あっちこつちに、右へ左へと曲がりながら逃げていく。

しかし、ノイズも諦めが悪く、触手を伸ばしたり上から降って来たりしてあの手この手で二人を殺そうと追ってくる。

そして遂に、追い詰められてしまった。大量のノイズに囲まれ、間をすり抜けられるような隙間も一切無い。即ち、詰み。

どうしようか、この子だけでも。と考えていると、背中におぶった少女が震える声を溢した。

「………… おねえちゃん。わたしたち、死んじゃうの……………」

「？」

「…………… ツ！！？」

その言葉を聞いて、響の中にある記憶が呼び起こされた。

2年前、かつての事件の時に掛けられた言葉。

『生きるのを諦めるなッ！！？』

「………… そう、そうだ。ここで諦めれない。あの時のように、あの人のように、私にも出来ることがある筈だッ！」

「おねえちゃん？」

「…………… ないで」

「え？」

「…………… 生きるのを、諦めないでッ！」

そう叫んだ瞬間、響の身体は光と熱に包まれた。

「お、始まったなあ。」

夕日が沈み、月が昇り始めた頃。沙樹はとある廃ビルの屋上でコンビニのコーヒーを啜っていた。カップの半分まで啜ってから顔を少しだけ顰めた。やっぱり女子になったからかブラックは意外と不味く感じた。前は一日2本飲んでたりしてたんだけどなあ、と愚痴を溢した。

そうして、慣れないブラックに一層顔を顰めていると、遠くから微かに声が聞こえた。

「生きるのを、諦めないでッ！」

そして、次いで歌が聞こえた。

決して諦める事のない、神すら打ち抜く歌が。

「^喪Bal^失wis^まsyal^で ^のNe^カscel^ウl ^ンgun^トgnir^ダ ^ウtron^ン」

「来たか。取り敢えず、第一関門突破つてところかな。」

響が GANG ニールを纏っていて安心した。これで GANG ニールが起動しませんでした、なんて事になってたら俺が出張ることになってた。というか、最悪見捨てたかもしれない。そこまで考えてから、我ながら酷いなあ。と言葉を漏らした。

そして、ドツという凄い音が鳴り、そっちの方向を見てみると響が少女を抱えながら遙か上空へと跳んでいた。その光景が、いつか見た魔法少女モノのアニメと似ていて、既視感を感じた。いや、もしかし

たらもつと別のアニメだったのだろうか。

「まっ、行きますかね。第三勢力としても顔見せないといけないだろうし。はあ、ホント楽じゃないなあ。」

一応、いつかの日に心に誓った、第三勢力として原作を支持するというのがはまだ続けるつもりだ。というか、あの鋼の騎士との一件で翼が軽々とノされていた所を見るに、暫くああいった騎士関係はこつちで殴り合わないと駄目だろう。じゃないと原作と俺の胃が死ぬ。

そして、たんっ、と音を立てて屋上のフェンスを飛び越えるとその歌を紡いだ。

「
knight of crazy Aroundlight tron」

黒い霧を纏いながら真つ逆さまに落ちて、着地。それと同時にうなじからコードが生えて、近くにいたノイズを刺していった。さらに着地時の衝撃の余波で、半径数メートルにいたノイズも吹き飛ばした。

そして、駆け出す。取り敢えず響のいる方向に向かい、進路上にノイズには塵になつてもらつた。

最初は殴つては蹴飛ばして散らしていたが、途中からちよつと面倒になつたので、アームドギアの鉄棍を創り出して薙ぎ払いながら進んでいった。

「はいはい、ちよつと通りますよ〜。」

誰に言うでもなく、意味のない言葉を吐いて目の前のナメクジ型のノイズを踏み潰し、上から刺してきた飛行型を左手で掴み取ると、もう一体の飛行型に叩きつけて倒す。そして右手で鉄棍を振るい、纏めてノイズを吹き飛ばした。

「お姉ちゃん、すごいすごいッ！ノイズ倒しちゃった！」

「あ、あはは………ありがとう。」

二人の女子の声が聞こえた。幼い声と、もう一つは活発そうな声。間違いなく響と助けられた幼女だろう。

しかし、声が聞こえたのは真正面の建物の向こう側。さらに沙樹の周りには大量のノイズ。

ならば、と沙樹は鉄棍を両手に握ると真上に跳躍した。さらに空中

で鉄棍を強く握ると、黒と赤の粒子が集まって来る。そして落下と共に鉄棍を地面に叩きつけた。

「オオオオオオオッ!!」

赤黒い衝撃波が叩きつけた場所を中心に迸った。衝撃波は文字通り波となつて無差別に周りを呑み込んでいく。

そして、衝撃波をくらつたノイズと建物は全て残骸と化し、辺り一帯が瓦礫の山となった。

因みに、この攻撃はある日突然出来るようになった。いつものようにノイズを叩く為に鉄棍を握りしめたら、赤い筋が入ると共に粒子まです出るようになった。

なんだか、段々と湖の騎士から離れていつてるような気もするが、そこはあまり考えないようにした。

「……………ふう。」

叩きつけた姿勢から戻り息を吐き出すと、そこには啞然とした様子の響と幼女がそこにいた。二人とも怪我は無さそうで、少しだけ安心した。

「黒、騎士……………?」

「お姉ちゃん、なんかあの怖い……………」

沙樹は、幼女に怖がられた事に少しだけショックを受けるも、響に向けて声を掛けた。

「オイ、その女。」

「えっと、私?」

「ああ。お前はそのガキを守ることだけを考えろ。」

少々乱暴な物言いに一瞬だけ呆然とするも、すぐに正気に戻つたのかわかつたと笑顔で返事すると手を握りしめて周りを見渡した。沙樹も鉄棍をクルクルと手先で弄び、駆け出した。その時だった。

歌が聞こえた、鋭すぎた剣のような歌が。

「羽 撃 き は 鋭 く 風 切 る 如 く
I m y u t e u s a m e n o h a b a k i r i t r o n

ギャリイ、と機械の悲鳴が聞こえた。

駆け出すのをやめて後ろを振り向くと、丁度顔面に誰も乗っていないバイクが突っ込んできていた。

上半身を逸らしながら、今日は殺意が高いなあ。などと呑気な事を考えていると、バイクは沙樹の頭上を通り越してノイズに直撃、そしてガソリンが引火したのか爆発した。どうやらこの世界はモブならずバイクまで生き残る事が厳しいようだ。

「ハアッ！」

「ッ！」

上から来たのはバイクを乗り捨てた装者こと風鳴翼。彼女は近くにあったノイズに一閃すると、沙樹の隣に立った。

「呆気ない、死ぬわよ。貴方はここでその子を守ってなさい！」

「は、はいッ！」

「それとアンノウン。今日こそ」

「断る。文句あるなら後でかかって来い。」

「…………… そうね。まずはノイズの方を先に！」

「言われ無くとも！」

沙樹の言葉と同時に二人は地を蹴ると、ノイズを横薙ぎ、あるいは叩き潰して殲滅していく。

不意に、空がキラキラと光が乱反射する。瞬きすると、そこには剣が空から大量に降り注いだ。いきなり上空からの攻撃に、ノイズは抵抗する間も無く塵と化していった。

「圧巻だな。」

「そう言ってもらえるとありがたい。」

二人でそんな軽口を言いながら残ったノイズを倒していると、響に守られていた幼女が声を上げた。

「…………… あ！お姉ちゃん！おっきいのがッ！」

幼女の言葉を受けて沙樹と翼も振り返ると、そこには巨大な緑色のノイズが響達に覆い被さろうとしていた。

響も、それになんとか戦おうとするが、ギアを纏ったばかりのアームドギアも無い新人が勝てる訳が無い。翼は技を放ったばかりで

そんなに連続で剣を降らす事は出来ない。ならばどうするか、答えは簡単。

俺が動けばいい。

「しゃがめッー」

思いつきり声を荒げながら指示すると、響は幼女を庇うようにしてその場に伏せた。

それを見届けた沙樹は、鉄棍を握りしめると綺麗な槍投げのフォームでそれを投げた。音速で飛んでいく鉄棍は大型ノイズに穴を開け、さらにその余波で穴を大きくした。

さらにダメ押しとして、思いつきり跳躍するとおそらく顔であろう部位に拳を見舞わせた。すると頭部はグリーンと1.5周しながら千切れて、そのままの勢いで明後日の方へ飛んで行った。

大型ノイズが塵となったのを確認した沙樹は、響の側に降り立つと声を掛けた。

「大丈夫か？」

「う、うん！大丈夫！」

「そうか。」

沙樹はハア、と息をすると手を頭上に掲げた。すると黒い霧と共に鉄棍が握られていた。手を下ろすとなんとなしに首を回してコキコキと音を鳴らした。

そして唐突に、恐ろしい程の寒気を感じて後ろに振り向きざまに鉄棍を両手で持ちながら構えた。

刹那、衝撃。横に振り抜かれようとしていた刀が、鉄棍を打って火花と鈍い甲高い金属音が響いた。さらに、刀は一撃だけに留まらず二度三度と鉄棍に打ちつけられていった。

呆然とする響達をよそに、沙樹はバックステップで距離を取ると鉄棍の先端を翼に向けて構えた。

「随分な挨拶だな。防人とは野蛮人の別称なのか？」

「違うッ！防人とは国を防人る者の事だッ！貴様には何も分かるまいッ！」

「…………… まあ、それもそうだな。」

両者が一步も動かず、各々の得物を構えたままに膠着状態に陥っていると、不意にサイレンとエンジンの二重奏がなりひびいた。

その刹那に駆け出したのは沙樹だった。たった一步で数メートル進みながら鉄棍を突き出すと翼の刀で受け止められる。しかし、それも沙樹にとつては想定内。

沙樹はそのまま力を込めて突撃。勿論、刀で受け止めていた翼は鉄棍を下に逸らしてこちらを斬ろうとするもそれは叶わない。何故なら、瞬きすらしない瞬間に翼は地面を見ていたのだから。

「……ッ!?」
「遅え。」

その事実気づいた時には頭を踏まれ、持っていた刀を蹴り飛ばされてしまった。無理矢理にでも立ちあがろうとするが、いかんせん頭を踏み続けられているせいで起き上がれない。それでも身体に力を入れてみると、上から黒騎士の声が聞こえた。

「弱いな。」
「っ！」

「もうちよいやれるのかと思ってたが……… 何というか、期待はずれだ。」

「……… ヅグ………！」
「てかさあ、何度も連行しようとするけどさ、自分より弱い上にやたら突っかかって来たりするの本当に迷惑。」
「………」

「まあ、これに懲りたらもう二度と勧誘して来んなよ。」

そこまで言うてから沙樹はこのまま足を退けていいのかと思案した。

ぶつちやけたところ、翼の勧誘にはかなりのストレスが溜まっていた。何度も拒否しているのについて来いとしか言われず、今となっては警告無しで斬り掛かって来るぐらいなのだから。

故に、沙樹はそれに警戒もせねばならずそれに神経をすり減らしていた。しかし、向こうも仕事でやってるから仕方ないと言えば仕方ないのだが。

思案の結論、まあ一発だけならええやろ。となった。言葉に意味が無いのならばは肉体言語で話すしかないだろう。軽く、取り敢えず死なない程度に。

そして、沙樹がトドメに鉄棍を振り上げたところで

いきなり横から突き飛ばされた。

「は。」

一瞬だけノイズかと思ったが違う。明らかな質量を持ったタツクルだった。それも柔らかい肌の感触がした。

突っ込んできた方向を見ると、そこには白と黄のシンフォギアを纏った響が切羽詰まったような顔をして立っていた。よく見ればうつすらと汗も出ている。

そんな彼女に苛立ちを交えた声を掛けた。

「何?」

「あのー！相手は人です！あなたと翼さんに、何があったかはわかりませんが、まずは！話し合いませんか?」

この時の沙樹は、兜の奥でとてつもない程の微妙な顔をしていた。原作を知る身としては、彼女の100%善意と正義なのだろうと理解出来る。しかし、タイミングが悪すぎた。例えるなら仕事が丁度終わった瞬間に、手伝いに来る人のようなもの。

厄介者に一発殴って終わりにしようとした所で茶々を入れられたのだから、それはキレそうになる。何というか、まだ見ぬ敵の気持ち分かるようなそんな気がした。でも。

「……………ハア。」

「え?」

「もういい、興醒めだ。帰る。」

「え?」

驚いたまま放心する響を置いていて、鉄棍をそこらに放り捨てると響達に背を向けて離れていく。半分、八つ当たりに近いような気もしたのでやめる事にした。

それに、近いうちに別の敵との戦闘もあるのだから、その為にも万

全の状態で戦ってほしい。八つ当たりなんぞまた別の機会にでも出来るだろう。

「(ホントは、響の件でいっぱいになって欲しい所だけど。)」
そう心の中で願いながら歩いていると、さっき来た黒い車から複数の黒服が降りて来た。

それらは、沙樹を通り過ぎると響の側にいた幼女や翼の手当てなどを始めた。それを一回振り返って一瞥するとまた歩き出した。すると、近くに歩いてくる黒服がいた。

「アンノウンさん。」

「なんだ、忍者。勧誘ならもうお断りだぞ。」

名前を緒川慎次。現代に生きる忍者にして翼のマネージャー兼二課エージェント。人外候補に挙げられる存在。

二課の勧誘の際に少しか戦ったことがあったが、とても強かった。攻撃が当たらない上に当たっても身代わりの術で避けられる。本当に厄介な相手だった。

最終的には、辺り一帯を爆破させて避けられないようにしたが、それでもスーツが少し傷ついた位で本人にはあまりダメージは入ってなかった。本当に人なのだろうか。

「いえ、お詫びをと思えます。」

「詫び?。」

「ええ、翼さんが粗相をしてしまったという事で。」

「詫びる位ならアイドルの教育でもしてくれ。このままじゃ足引つ張る木偶の坊になるぞ。」

「あはは………申し訳ありません。」

慎次を背に言葉を聞き流して、そしてまた歩き出して、その刹那だった。

聴き覚えのある、金属音がした。

二人揃って後ろに振り向くと、そこには巨大な剣が刺さっていた。そして次いで空に見えたのは夜空よりも黒い鴉。そしてその鴉の

足から切り離されるように巨大な物体が落ちて、土埃を巻き上げながら着地した。

その物体、鎧は銀色の光沢を持っており明らかに成人男性以上の巨体だった。背中には斧やら剣の柄が見え隠れしており、赤黒い液体も付着している事からかなりの手練れだと直感した。

鎧は剣を地面から抜くと、軽く土を払い大きな円盾を握りしめた。それから辺りをゆっくりと見回していく。まるで品定めでもするかのようには黒服を、響を、幼女を、一つ一つじっくりと。

そして、沙樹を見つけると浮いた。何の比喻も無しにスツと音もなく操り糸でもあるかのように地面から足が離れた。

目が煌く。兜のバイザーから紅の光が灯り、真っ直ぐに此方を見据えた。

完全な戦闘態勢になったところで、不意に鎧からくぐもった声が聞こえた。半壊した機械のような声だった。

「縛雁燕縛後？∞勳縛九？」

「あ？」

「縛雁燕縛呈ヨコ縛咄？ゆ◎縛後、荳サ縛ヨ譜帙∩縛？縲」

「あー、おーけーおーけー。」

恐らく、お互いが何を喋っているかは分からない。しかし、両者にとっても何となく分かったことがあった。

沙樹が手を横に伸ばし手に黒い光を収束させると、いつもの無骨な大剣が握られていた。それを肩に担ぐとゆっくりと一定の位置まで進んでから止まった。

「つまり」

「殺せばいいんだな？」

「

纏九。

「

纏ヲ

纏難

縲∞

濠遶

ツ

「

脆く、強く。

目の前がとても明るかった。いつか見たライブにも負けず劣らずの光でとても眩しかった。

巨大な鎧を着込んだ浮遊する騎士。もう一方は翼さんや私によく似た真つ黒なピッチリスーツに節々にプロテクターを着けた騎士。

両方とも、目に追いつかない程の速さで剣をぶつけ合って一歩たりとも引かない。まるで映画のワンシーンを見てるような、そんな感覚になって何処か現実感が無かった。

「あれが、黒騎士。」

口から言葉が滑り落ちた。

頭の中で、つい数時間前に見たネットニュースやまとめサイトで見た『黒騎士』についての噂が駆け巡る。

曰く、それは黒い霧を纏った騎士だとか。

曰く、ノイズから助けてくれるとか。

曰く、人では無いとか。

ああ、これは確かにそうだ。全ての噂に当てはまりそうな姿をしている。黒い霧の中から見える赤い光。獣のような声で叫びながら大剣を振る姿。

「(これが、黒騎士。)」

でも、何処か、何かがおかしかった。まるであの叫びが悲鳴のようにも思えて仕方が無かった。いや、悲鳴というよりは恐怖だろうか。

鎧と鎧、剣と剣。それらの金属と金属が擦れ合い、散らす火花は街灯よりも場を照らしている。

黒い騎士が振るう無骨な大剣は、赤い軌道を描きながら相手の剣を打ち付けている。方や、宙に浮く騎士が振るう大剣は所々が欠けて鏽

びており、鋭くはないようだ。

しかし、騎士の膂力が強いのか、振り抜いた大剣は建造物の壁を斬った。否、砕いた。

荒々しい剣技と、力に物を言わせる剣技。それがぶつかり合う。

「(強つ。いや、こいつの力どうなってるんだ!?)」

沙樹は騎士の袈裟斬りをバックステップで回避しながら考える。騎士は地に足をつけておらず、浮いているせいか移動速度が他の騎士よりもずば抜けて速かった。

「(それでも)」

バックステップや体を逸らすなどの回避を多用して、反撃の瞬間を待ち続ける。

突き、シールドバツシュ、横薙ぎ、上段からの振り下ろし。それらを全て見切る。

「(負ける訳には行かないんだよ!!?)」

上段からの振り下ろしが沙樹の防ぐように構えた大剣に触れた瞬間、沙樹は剣先を斜め下に向けて受け流した。

そして手首を返しながら相手の胴に思いつき一撃を叩き込んだ。

「割れるオッー!」

しかし、刃が鎧に触れることは無かった。

鎧は無理矢理に上半身を逸らすと、沙樹の大剣をギリギリ触れない程度に避けると、顔面へ向けて大盾の縁を突き出した。

思いつき振り振った大剣が避けられるとは思ってなかった沙樹が、勿論避けることも考えておらず、大盾がモロに顔面に入った沙樹は一瞬で体がブレたかと思うと十数メートルは飛ばされていた。

「……………ッ!」

沙樹は二回ほど地面にバウンドしたかと思うと、大剣を地面に突き刺して両足で踏ん張って衝撃を緩めた。そして正面を向きながら大きく息を吐くと鎧を睨みつけた。

「……………クソ野郎が。本当に手加減ナシかよ。」

今までの騎士とは違う。少なくとも沙樹はそう思った。尋常じや

ない膂力、高い機動力、カウンターを躲す反射神経。どれを取っても今の沙樹には敵わないモノだった。

「譚・縛エ縛?縛具シ湍→纏峨?縛薙■纏峨。纏芽。後?縛槭?」
「つままた!?」

そして、喋る。何を言っているのかは理解できないが、少なくとも喋るだけの意志と思考を持っていることから、そういった点でもこの騎士は異常だと言わざるを得ない。

騎士は、正面から剣と盾を構えて猛スピードで突進して来る。それに対して、沙樹も地を蹴って一步数メートル間隔で突っ込みに行く。カウンターが避けられるのなら、こちらから叩き斬る。沙樹はそのつもりで走って間合いを詰めた。

しかし、またも騎士が先を行った。何と、間合いに入る前にその場で剣を下から掬うように振った。それは騎士のなまぐらの剣と膂力により、地面を抉り飛ばした。

その二つの要素は、抉り飛ばした土、コンクリートを音速の弾丸となつて沙樹を襲う。

沙樹は反射的に大剣の先端を斜め下に、側面を手で支えるように盾のように構えて、瓦礫の弾丸を防ぐ。瓦礫の弾丸はかなりの威力で飛来し大剣に激突するとそのまま逸れて何処かへと行ってしまった。

この防御が不味かつたのだろう。

真正面から飛来する瓦礫の弾丸は、沙樹に当たったとしても少なくとも痣で終わってただろう。しかし、防いだ。

大剣を盾のようにして防いだということは視界を塞ぐのと同じ。詰まるところ、沙樹は選択を間違えたのだ。

沙樹が構えを解いて、視界に映ったのはくすんだ銀色。即ち、鋼。浮遊する騎士の鎧だった。そして視線を上に向けると、半分くらい振り下ろされた剣。

「(あの瓦礫はブラフ!本命はこっちだったという事かッ!!?)」

つまり、瓦礫の弾丸で目眩し、或いは回避行動をさせて、音も無く突撃。怯ませた相手をそのまま斬ることだった。

沙樹は体の反射神経を総動員させて大剣を真上に挙げて防いだ。

そして、コンマ数秒でやってくる衝撃。まるで上から鉄塊が降ってきたのを受け止めたような、そんな物だった。

あまりの強さに片膝をつき、手が痺れていくが浮遊する騎士はお構い無しに剣を叩きつける。

「このままじゃ、潰される！」

沙樹はそう考えるや否や、騎士の4回目に剣を振り上げたところで体勢を整える。いつでも横に飛べるように脚に力を入れて待機。

そして騎士が剣を振り下ろす。それと同時に大剣の構えを解いて左に飛び出すようにして回避。さらに大剣を右斜め下持ってきて思いつき踏み込んだ。

「いっぺん死ねやアツ！」

喝を入れるように、言い聞かせるように叫びながら大剣を左上まで振り上げた。が、

ガチンツ、と金属同士がぶつかり合う音と共に剣が交差したまま静止した。それを沙樹は振り払うと浮遊する騎士も後方へと下がり、また睨み合いになった。

ピシッ

今度は沙樹から動き始めた。取り敢えず走って騎士に肉薄しようとするが、騎士は一步も動かずに静観するのみ。

沙樹はほんの少しだけ疑問を持つも走りながら前を見た。そして間合いに入ったところで、思いつきりの前傾姿勢で突きを放った。それは、いつかの鋼の騎士が放った突きと同じような物だった。

ミシッ

しかし、それすらも大盾で受け止められてしまって、沙樹は体勢を崩しそうになるも、無理矢理に上に飛ぶと大剣を騎士の兜に全力で振り下ろした。だが

パチンツ

兜が剣に触れたその刹那、変な音がした。

「……………あ？」

視界の先にあるはずの刃が無い。

「いや、待ておかしい確かに何度も何度も打ち合ったがそん

な事で折れる筈が無いってかアームドギアでも折れるのか!?! いやそんな筈は無いアロンドイトは絶対刃こぼれしない剣でも鉄棍の例もあるし)..... あ。」

大剣が折れた衝撃からか、一瞬で頭の中でさまざまな感情が混ざり合う。しかし、その一瞬は沙樹にとつての命取りになるものだった。

折れた大剣を見つめていた沙樹に、浮遊する騎士の容赦無い一撃が襲いかかって来た。一拍遅れて折れてる大剣で迎撃しようにも、まあ届かない訳で。

「あ”っ”」

胸に叩き込まれた剣は、ボロボロで鋭さなど無くなったなまくら。そして異常な膂力。その二つが合わさることは人体を破壊するのにはとても適していた。

瞬間、肋骨が砕けた。身体が横のくの字に曲がり、景色が線のようになって流れていった。工場の壁を数枚ぶち抜くと、やがて大きな機械に激突して止まった。

「.....ア、カツ、ヴェ」

まずい、本当にまずい。恐らく内臓にもダメージが入ったのだろう。口から血が溢れ出て息がうまく吸えない。視界は点滅し始めて、瞼は鉛でも付いたかのように重くなった。

「グツ、ツ、ガホッ！ゲホッ！」

何とかうつ伏せになって口から血を吐き出して、少し咳き込んだ。それから自身の身体を見下ろすと、脇腹の辺りがザツクリと切られて血が出続けていると同時に、その付近が変色している事からかなり派手にやられたようだ。

そこまで考えてから、息を吸い込んでゆっくりと吐いてみると、まだ喉に血が残っていたのか小さく咳き込んだ。身体の節々は生まれたての子鹿のように震え、右手にある大剣は半分に折れて使えなくなっていた。

「やら、れたな、これは。」

そう独りごちた瞬間、瞼は重さに耐えきれず落ちてしまい、意識が溶け出す。

その時、視界が暗くなる寸前、翼をはためかせる音が聞こえた。

一瞬だった。よく見えなかったが、黒騎士の脇腹に剣が叩き込まれて姿が消えた。かと思ったら幾つか先の建物で破壊音がしたからそこまで吹き飛ばされたのだろう。

響は目の前で黒騎士が負けた事に現実味を感じられなかった。いや、響だけで無く現場にいた慎次やその動向を司令室で見っていた弦十郎も口を開けて呆然としていた。

突如、浮遊する騎士が此方を向いた。

「……………ッ！」

響は思わず身構えるが、浮遊する騎士は気にも留めず何かを呟いた。

「潜溷セ?? 纏壹ー纏? 纏 漚→縲ゆー纏ゆ< 纏?? ∞クー驍? ☆縲九?」

「……………え?」

多分、どこの国でも無いようなそんな言葉。少なくとも、響の中では聞いた事のない言葉だった。

それを呟いた騎士は次の瞬間、何処からともなくやって来た巨大なカラスに肩を掴まれて、夜空へと消え去った。

「……………はえ?」

その光景に響はただ口を開けてポカンとしていた。そのまま目をパチパチとさせていると、突如隣から声が掛かった。

「あつたかいものどうぞ。」

「あつ、あつたかいものどうも……………」

女性から受け取った紙コップを覗いてみると、黒く澄んだ液体が注がれていた。グツと液体を流し込むと、暖かさと共に段々と周りが見えて来た。

いつの間にか騒がしくなっており、現場の検証や倒れた翼を介抱している人達など、敵がもういない事に安心して肩の力が抜けていった。すると、ピツチリした服が光ったかと思うといつものリディアン
の制服に戻った。

「うわ、わ!?？」

それにビツクリしてしまつてその場にへたり込んだ。ついでに腰も抜けて立てそうに無かつた。

「あつ、おねえちゃん！」

「あ、あの時の！」

声がして、後ろを見てみると、さつき助けた少女が母親と一緒に手を繋いでいた。幸い、母親のほうも元気そうだったので響は胸を撫で下ろした。

「大丈夫? 怪我とか無い?」

「だいじょうぶ! おねえちゃんとくろきしがまもつてくれたからツ! ありがとうツ! ばいばーいツ!」

「よかつた。じゃあ私もそろそろ「そうはいきません。」

「えツ!??」というか何で私囲まれて…………?」

いつの間にか黒服のサングラスを掛けた人達に囲まれていた。いつか沙樹と一緒に見たアニメもこんな感じだったなあ。と、響は的はずれな事を一瞬考えた。

「えつと、その。」

「特異災害対策機動部二課まで同行していただきます。」

「え、ええええええええええええええええ!??」

ゴツイ手錠をかけられ、黒塗りの車に乗せられた響はそう叫ぶしか無かつた。

例の如くギリギリだけど、何とか生きています。

「は〜い！響ちゃん！笑って笑って〜！」

「え、あ、あはは……………」

何でこうなったんだろう。そう響は心の中で呟くと、少し胡散臭さがする女性とツーショットを収めた。

―数刻前―

「あの、これって……………」

ゆらゆらと車に揺すられること約数分。両サイドに座った黒服の無言に耐えながらも目的地に到着したようだ。しかし目の前には、どういう訳かいつものリディアン女学院が目の前にあった。

響が目パチクリさせている間に、黒服達が校舎内へ入っていくのを見て慌てて早歩きで追いかけた。

校舎内に入って廊下を数回曲がるとエレベーターの鉄扉がそこにあつた。響の不安ですこし震える足を見て、茶髪の黒服こと、『緒川慎次』は微笑みながら声を掛けた。

「心配しなくても大丈夫ですよ。別にそこまで気負わないでください。それと手すりには掴まったほうがいいですよ。」

「へ、あ、はいいいいいいいいいい!?」

慎次の言葉に少しだけ安心したのも束の間。手すりを掴もうとしたところでエレベーターはとんでもない速度で動き出し、さながら響は絶叫マシンの如き悲鳴を上げた。

あんまりな自身の悲鳴に愛想笑いを浮かべると、ふと視界に変な模様が見えた。そのエレベーターの外側には不思議な模様が描かれた景色があつたのだ。

「……………すごい、学校の地下にこんな場所が……………えと、どれだけ深いんですか？」

響が問いかけるも黒服達は何も答えない。ただ黙って正面を向いているばかりだ。そんな状態に響ももう一度愛想笑いを浮かべた。そしてエレベーターが到着すると、子鹿のように震える足をなんとか動かしながら黒服に付いていく。

「さあ、こちらです。」

そして、目的地であろう少し大きな扉が開いた。それに合わせて響も何が待ち受けているのか身構えた。

「ようこそッ！人類守護の砦、特異災害対策機動部二課へッ！」

「……………ふえ？」

そして冒頭に戻る。

そこからは怒涛の勢いで色んなことがあつた。勝手に鞆から響のことが知られていたり、今日のこととは秘密だと言われたり、果てには検査の為に裸になったり。

大体のことが終わった後、響の体力が限界だった為に今日は解散ということになった。

俺は一般装者擬き、方波見沙樹！装者なりたてホヤホヤの友達とノイズをぶん殴ってたら怪しい騎士と戦闘になってしまっ！騎士との戦闘に夢中だった俺は、不慮の事故から騎士の一撃に対応出来なかつ

た！俺はそのまま吹き飛ばされて……… 目が覚めたら裏路地の隅に座っていた！そして怪我也殆ど治ってた！

「生きてるウー！」

歓喜のあまり両手を挙げてコロンビア。身体は若干気だるいが、そこまででも無かった。

辺りを見回すと、そこはいつかの鉄騎士と戦った日に腰掛けた廃材置き場の裏路地であり、前にも眠るように気絶した日にいつの間にか治療されていた所だった。

「つつてもなんだってこんな所に……… つか今何時だ………？」

頭をぐしゃぐしゃと掻きながら立ち上がると、ポケットに入ってたスマホを取り出して時間を確認した。その瞬間沙樹の目玉が飛び出そうになった。

なんと真夜中の11時。いつも帰ってくる時間より3時間遅い。というか遅すぎて響に余計な勘繰りとかされてないだろうか、と考えて鳥肌が立った。

「やっべー！すぐ帰らねーと。」

独り愚痴ると、戦闘で鍛え上げた脚をフルに使って寮まで走り続けた。体感だが、恐らく某人類最速よりも速かったんじゃないかと後に彼女はそう思った。

寮の自室には幸いなことに、まだ響が帰ってきていなかった。恐らくまだシンフォギア関連のことについて色々説明とかがあったのだろう。響が帰ってくるまで暇なので、その間に色々整理することにした。

中学校から使っている真っ黒な手帳をパラパラと捲り、ボールペンを手に取ると新たに情報を書き込んでいく。

ページの左上に『浮遊騎士』と書き付け、その詳細と能力を事細かに記す。浮いてるが故の高機動力、アームドギアすらへし折る程の一

撃の重さ、カウンターを反射的に避ける回避能力。どれを取っても今までの最大の脅威とも言えるだろう。

そして、喋る。これが今までの騎士には無かった事例だろう。正直、あの言葉に何か意味があるのかと問われれば首を傾げるしかないが、まあ無かつたらそもそも喋りはしないだろう。警戒の必要性はあり、とペンを走らせた。

もつと言えば、疑問はまだまだ尽きない。あの騎士の連中は何処から来たのか、ということや何故襲い掛かってくるのか、なんで喋る个体と喋らない个体がいるのか。自分の負った傷は治っているのか。挙げていけばキリが無い。

椅子の背もたれに寄りかかり、ぐっと伸びをすると全身の関節からバキバキと音が鳴った。時計にはゼロが四つ並んでおり、かなり長く熟慮していたのだろう。その事実気づいた途端に瞼が重くなってきた。

このままたと明日に支障が出るなあ、と先に寝てようかと腰を上げたところで部屋にノックの音がした。

「ん、はーいー!」

「失礼します、方波見さんですね?」

「え、あ、はい、それでスウ!?」

ドアからひよつこりと顔を出した背広の茶髪は、紛うこと無き忍者の緒川慎次だった。本来ここは防人が送っていった筈なので、いきなりの忍者に変な声が出てしまった。

そして響はその忍者の背中に背負われており、すやすやと寝息を立てて幸せそうにしていた。

「あはは……… そんなに驚かなくても大丈夫ですよ。私は特異災害対策機動部の緒川慎次という者です。」

「はあ………」

「響さんはノイズに襲われていた所を保護しましたので送り届けに来ました。起きてください、響さん。」

そう言っつて響を下ろそうとするが熟睡しているのかとても起きれるような状態じゃ無かった。

「ああ、わざわざありがとうございます。おーい響。起きて。」

「むにや……………ご飯……………」

「あーもう、全く…っ！」

こいつは夢の中でも飯を食ってるのだろう。まあそれこそ響らしいと言えば響らしいが、今は早めに忍者に帰ってほしいのでやや強引に慎次の背中から響を引っぺがすと米俵のように抱えた。

響は体重は秘密だと言っていたが以外と重く無く、沙樹自身はいつものノイズ狩りで筋力がそこそこついているので、苦もなく持ち上げられた。

「それは……………大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫です。本当にご迷惑をお掛けしました。」

「いえいえ、それが私達の仕事なので。では。」

そしてお互いに深く礼をすると、慎次は出て行った。

その場で数秒間、沈黙が続くと沙樹は思いつき溜め息を吐いた。いかんせん今日は予想外のことが多すぎた。あの騎士の乱入以外にもこんな細部まで変わっているとは思わなかった。本来ならば風鳴翼が送っていつて響が一人で部屋に入るシーンだった筈のだが、何処かで何か違えたというのだろうか。

「はあ、いずれにせよ、仕方ない。なるべく原作を壊さないようにしないとなあ……………」

空いてる手を意味もなく、ぱきりと鳴らして少しだけ乱雑に響をベッドへ寝かせた。だが、そこで響が制服のままだったのに気づき仕方なく起こすことにした。流石にこのまま寝かせると制服が皺になる。

「響ー。起きてー。」

ゆっさゆっさ、つんつん、取り敢えず起こそうとするも中々起きないので少々乱暴な手段に出ることにした。

人差し指と親指で丸を作り、思いつき人差し指で響の眉間を弾いた。所謂デコピンと呼ばれるものだったが、効果は的面だったらしくガバツと起き上がった。

「ふえっ!? 起きてますー！先生！寝てないですー！」

「よし、もう一発いっとくか。」

もう一度ベシューン。今度は鼻の辺りに直撃した。響は変な声を出しながらベッドから転げ落ち、半分開いた目でこっちを見た。どうやらようやくこちらの事を認識したようだ。

「いたた…………… もう、沙樹は起こすのが乱暴なんだよ〜！」

「はいはい、でもこうでもしないと起きないでしょ？それと、さつき特異災害機動部の人が送ってくれたよ？」

「え、そうだったの？？」

「そうだよ。それにちよつと困ってたから、もし次会った時にでも謝っておいた方がいいよ？」

「う、そうだね…………… ははは……………。」

「全く…………… ほら着替えて。制服シワになるよ？」

「うん……………。」

と、響が制服に手を掛けたところで、盛大に腹の虫が鳴いた。二人で数秒間静寂を作ってから、お互いに笑い合った。そして夜食の話をしながら二人でキツチンに並んだ。

何処かの裏路地。その最奥に巨大な鎧、あの浮遊する騎士が鎮座していた。紅の眼光は未だに灯っていて、上下左右に忙しく動いている。

そこに黒い鴉が飛んで来ると近くの出っ張りに止まった。鴉の目も紅く光っており、異質な雰囲気放っていた。

そしてその鴉が口を開くと、鳴き声ではなく妖艶な女性の声が響いた。

「で、あの子はどうだったかしら？」

「蜈イ辟力縛？縲√し縲九丱縛エ縛」縛。縲？∨縛エ縛。」

「そう。まあでも仕方ないわ、アレはごく一部の適合者にしか使えない異端の証。仮に適合したとしても使いこなせずに滅ぶのが関の山でしょうねえ。」

「菴墓腐縛雁燕縛ツ縛ゆ？莠コ髻薙←蜿ツ閤ス諤ア縲定ヲ句？縛励◆？」

「それはあの魂よ。彼女、いえ彼の魂はとても珍しいものだったわ。可憐でいて腐っている。秩序的なようでもその裏側は混沌と化している。そして捻り曲がった芯。どれを取っても惹かれるものばかりだったの。」

「……………縛、縛セ縲翫？ff？蜻ウ諧ヤ菴阪丱菴懊j荳翫？

縛溘↓縲」

「ええ、そうとも言うわね。でも、アレは以外と馬鹿に出来ないような存在よ。貴方も次にはやられるかもしれないわよ？」

「縛ツ縛？√#蠢？蜻顔李縛ソ蜈・縲翫し縛唸？」

「ふふつ、期待してるわね？」

その言葉を最後に、騎士の紅の光は消えて鴉はふわりと翔んでいった。鴉は月に照らされながらコンクリートのジャングルを駆け抜けていき、やがて夜空に消えた。

そして、朝日が街を朱色に染めていく。

戦うのはいいけど、なんか誤解されています。

「では、これで授業を終わります。」

終業のチャイムが鳴り響くりディアン女学院。最後の授業が終わったことにより、欠伸をする生徒や部活道具を片手に教室を出る生徒など様々だった。

沙樹もその例に漏れず、背骨をパキパキと鳴らしながら伸びをする。と大口を開けて欠伸をした。そして、隣に座っていた響はまだ机に顔を突っ伏して眠っていた。

流星に帰らないといけないと思ったのか、沙樹が響の肩を掴んでゆさゆさと揺すった。

「起きて、響。そろそろ帰ろう?」

「うーん、むにや……………んっ……………おはよう?」

「ああもう、ほら、涎垂れてる。」

「えっ!??ウソっ!??」

「冗談。」

「もう、びつくりした!」

「ふふ、ごめんごめん。ほら帰ろう?」

そんなくだらない言葉を掛け合っていると、視界の隅に青い頭髮が見えた。一瞬だけ見間違いかと思ったが、明らかにあのアイドルの髪色だった上に教室のドアから毛先が見え隠れしていたことから、完全にこつちに用があるようだった。

まあ、恐らく用があるのは響なので、取り敢えず翼の方に仕向けるでしょう。

「……………響、あそこにいるのって翼先輩じゃない?」

「え!??……………あ、本当だ!翼さん!??」

じつとしていた翼に、響が慌てて駆け寄る。そしてそのまま小声で二言、三言交わすと申し訳なさそうな顔の響が戻ってきた。

「ごめん、沙樹！用事出来ちゃったから先に帰ってて！」

「大丈夫だから行っておいで。あ、今日の晩御飯はハンバーグだから。」

「わーい！ありがとう！沙樹！」

響はそのまま翼と一緒に教室から出て行った。沙樹は未だに残る眠気を欠伸をして後ろ手に手を組みながら胸を張るようにして伸びをした。

ふと、窓の外を眺めると、グラウンドにはジャージで走っている人が多く、どこからかマウスピースの音も鳴り響いてきた。

「そういや、部活とか入ってなかったなあ、俺。」

この世界に転生する前は、帰宅部陰キャのゲーセン寄り道音ゲーマーチンパンだった。部活もこれといって入りたいのが無く、友達も言うほどは少なかったが寄り道でやったグ○コスはとても楽しかった。今は近くに寮があるから寄り道する理由も無くなっちゃったなあ。

鞆片手に教室を出るとダラダラゆっくり歩く。窓から差す西日と春の生温い風が少しだけ鬱陶しく感じた。

「ハアア……………よし、メシ作って、さっさと行くかあ。」

響が翼に連れられていったという事は、恐らく二課についての説明やら何やらがあるのだろう。そして、もし原作通りならば説明の後はノイズ襲来からの翼と響の喧嘩だろう。いや、あれは喧嘩というよりは翼の逆ギレ、もしくはパワハラに近いかもしれない。

「まあでも響も人の触れてほしくない所に踏み込むからなあ……………」

ほんと、あのバカは殆どの敵の触れてほしくない所にズカズカ入り込む。アニメ見てた時は伝統芸だと思っていたが、実際に見るとなると少しだけ憂鬱になる。何が悲しくて一流アーティストと友達の不和を眺めなくてはいけないのか。

実際、あの性格で救われた奴もいたのだろうが、それはそれ、これはこれ、だろう。現実と二次元は違うのだ。

「あー、面倒くせ。」

愚痴を言っても始まらないだろう。やや強くなった西日を少し睨みつけると、早歩きで寮へ向かった。

ところ変わってリディアン女学院の地下、特異災害機動部二課の本部にて。司令室には響の他に櫻井了子や風鳴弦十郎などの重役の姿がそこにはあった。

「それでは〜！先日のメデイカルチェックの発表〜！初体験の負荷は若干残ってるものの、体に異常はほぼ見られませんでした〜！」

了子が明るく言うと、響は胸を撫で下ろしながらホッと息をついた。

「ほぼ……………ですか……………良かった……………でも、教えて下さいッ！あの力の事を！」

響の質問に弦十郎が頷くと、モニターに赤いペンダントが映った。

「天羽々斬。翼の持つ第1号聖遺物だ。」

「聖遺物？」

「聖遺物とは、世界各地の伝承に登場する現代では製造不可能な異端技術の結晶の事だ。」

弦十郎の言葉に響は口をポカンと開けた。

「多くは遺跡から発掘されるんだけど、経年による破損が著しくつてかつての力をそのまま秘めた物は本当に希少なのだ。」

了子は響に聖遺物について説明した。しかし口を開いたまま呆けるだけであまり説明は頭の中に入っていないようだ。

「翼の天羽々斬もそうだ。刃の欠片が入っている。」

「欠片にほんの少し残った力を増幅して解放つ唯一の鍵が特定振幅

の波導なの。」

「とくていしんぶくのはどう……………？」

段々と響の顔がFXで破産したような顔になってきている。恐らく、殆ど理解出来ていないだろう。

それに知ってか知らずか、二人は説明を続けている。

「つまりは歌。歌の力によって聖遺物は起動するのだ。」

「歌の力……………」

「まあ、簡単に言えばその聖遺物と歌によってノイズに対抗する力になるということだ。」

「それこそが、身に纏うアンチノイズプロテクター、シンフォギアなの。」

「シン、フォギア……………」

赤いペンダントが照明を反射して輝く。それが吸い込まれるように鮮やかで、綺麗な宝石のようだと響は感じた。

「だからとて！」

その時、翼が突然声を上げた。睨みつけるように、親の仇でも見るような鋭い目だった。

「どんな歌、誰の歌にも聖遺物を起動させる力が備わっている訳ではない！」

翼が言い終わっても尚、睨みつけてくる。その脳裏にはかつての片翼がよぎっていた。

弦十郎も小さく溜息をつく。響を真っ直ぐに見据えて話を続けた。

「…………… 聖遺物を起動させ、シンフォギアを纏う歌を歌える僅かな人間を、我々は適合者と呼んでいる。それが翼であり、君であるのだ。」

「適合者……………」

響が反芻するように呟いた。いつの間にかFXで有金溶かした顔から困り顔ぐらいにはなっていた。ざっくりとした概要は理解出来たのだろうか。

ほんの少しだけ内容が分かったところで、ふと気になった事を聞いてみることにした。

「あの！私、聖遺物とか持ってないんですけど……………」

「いや、持っている。正確には埋まっていると言った方が正しいが、これを見てくれ。メデイカルチェックで撮ったX線写真だ。」

響は自分は聖遺物を持っていないと主張すると、弦十郎が首を横に振りながら答えて、モニターにレントゲン写真が映しだされた。

「心臓付近に複雑に食い込んで、手術でも摘出不可能な破片……………」

了子がモニターを見ながら呟くように説明する。

「調査の結果、奏ちやんが身に纏っていた第3聖遺物、ガングニールの破片であることが判明したわ。」

その言葉に翼がピクリと動いた。しかしそれが視界に入っていないのか、了子はそのまま続けた。

「奏ちやんの置き土産ね。」

「！」

翼は了子の言葉を聞いて少し悲しそうな顔をする、そのまま司令部から出て行ってしまった。

弦十郎がその様を見届けると同時に、響が声を上げた。

「あの、それで私はこれからどうしたら……………」

「日本政府、特異災害機動部二課として、協力を要請したい。君のシンフォギアの力を、我々に貸してくれないだろうか？」

弦十郎の言葉に、響は少しだけ考えると固い決意を込めて声を掛けた。

「私の力で、誰かを助けられるんですよね？」

響の言葉に弦十郎と了子は頷く。

「それなら、この力で誰かを助けられるなら やりますッ!!？」

力強く、宣言するように叫んだ。

今日、此処に雛鳥は卵から孵った。

その宣言の後、響は暫くさまざまな注意事項やこれからの事などの

説明を受けた。シンフォギアは政府の機密であること、ノイズの出現時に連絡することなどだった。

「……………さて、二課については取り敢えずこれぐらいかしらね。あと他に質問はあるかしら？」

「えーと、あ、あともう一つ！」

「はい、なにかしら？」

『黒騎士』さんって、あの人はいったい何ですか？」

響がその疑問を投げかけた時、司令室の空気があからさまに重くなった。二人のオペレーターは眉間に皺を寄せ、了子は面白くないというように溜息を吐いた。そして弦十郎は腕組みをしながら低い声で唸った。

これには、響もやらかしたと思つて申し訳なさそうに顔を俯かせながら謝罪の言葉を吐いた。

「えっと……………その、すみません！」

「いや、いい。響くんが悪い訳ではない。」

弦十郎が口をへの字に曲げて、再度唸ると口を開いた。

「識別名『アンノウン』。正体不明の存在だ。」

「彼、または彼女は5年前。近くの山でノイズと共にエネルギー反応が確認されたのが最初だ。」

「最初は単なるノイズの出現だと思つただけどねえ。未確認のアウトプット波形まで検出されたら大事になっちゃって。」

「ノイズと共にって、じゃあ黒騎士さんって敵なんですか？？」

「いや、恐らく黒騎士はノイズと敵対関係にあると言つて良いだろう。もしそうでなかったらノイズを殲滅するような事はしない。」

「……………じゃあ、何と戦ってるんですか？あの人は私達のことを守るようにもしてましたけど……………」

響が首を傾げながら弦十郎に問いかけると、弦十郎は難しそうに顔を顰めながら呟いた。

「分からない。」

「え？」

「分からないんだ。本当に何か得体の知れない者たちと戦っている。」

そうとしか言いようが無い。」

「得体の知れない者？」

響が反芻するように呟くとすかさず了子が説明を入れてきた。

「響ちゃん、この間のでっかい騎士みたいなの見たでしょ？」

「あの空から降ってきた鎧ですよ。あれもノイズの一種かと思ったんですけど、違うんですか？」

「ええ、アレはノイズの一種でも無いわ。かと言って人でも無い。全く未知の存在よ。この世には存在しない物体で構成された謎の生命体。」

「未知の………生命体。」

「黒騎士曰く、『不要品』だと言ってたわね。あと黒騎士が初めてメディアに取り上げられた時のこと覚えてるかしら？」

「あのデパートに出現した時のことでしたよね。一部のフロアが半壊したって結構な事になってましたけど………」

響もあの時のことはよく覚えていた。ツヴァイウィングのライブの事件後に起こったので、当時は様々な推測が飛び交っていた。あれはノイズの親玉なんじゃ無いか、とかノイズを引き連れて本格的に世界を滅ぼしにきたんじゃないか。とか散々な言われようだった。

結局、いつの間にか政府が黒騎士の存在を認めたのと、マスコミが黒騎士とノイズが戦っている映像や、黒騎士に助けられた人達が居たという事でノイズから一転、正義のヒーローになっていった。

「そう、あの時も黒騎士は別の騎士と戦ったの。」

「本当ですか!?？じゃあ、黒騎士さんっていい人じゃ………」

「ところが、それでも無いのよねえ。いい？響ちゃん。黒騎士はね、一般市民にも手を出してるわ。」

「え」

「正直、私も思い出したく無いのだけれど」

曰く、ある日ノイズを殲滅した黒騎士にカメラ片手に突撃していった動画配信者がいたらしい。その配信者は界限では悪い意味で有名で、人の悪口や迷惑行為を動画にして儲けようとする炎上商法をしていたのだとか。

周りにいた一課の制止を振り切り、突撃していった配信者は黒騎士に矢継ぎ早に質問を浴びせ掛けた。しかし黒騎士は無視するだけで応じようとしなかったらしいが、何を思ったか次の瞬間

配信者の頭が潰え、地面に赤いシミが残った。

つまるところ、黒騎士の武器である鉄棍を思いっきり叩きつけて殺したのだ。勿論、一課も二課も大慌てになったらしいが政府が『市民の安心と信頼を得る為のプロパガンダ&シンフォギア秘匿の為のスケープゴート』として、その配信者はノイズに消されたと処理する事になった。

「　　という事があったのよ。」

「人を、殺してる……………？どうして、そんな……………!?？」

「私達も理由が分かったら苦労はしないのだけれどねえ。」

それに、と了子は一言付け足すと響にとっては耳を疑うような爆弾を落とした。

「　　あなたの友達、沙樹ちゃんも被害者よ。」

ビルとビルの間を、兎の如く跳ね回る黒い影が夕陽に照らされていった。その正体は今話題のスーパーヒーロー黒騎士兼スーパーキュートイクル美少女をやっている方波見沙樹である。

などと、ふざけたナレーションを脳内に垂れ流しにしてみるもあまり余裕は無い。学校から帰って料理を作っていたら、ノイズの警報が鳴り響いたので料理もそこそこに部屋を飛び出して来た。

因みに、あまりにも慌てて出て行ったので部屋の電気を消したかどうかは覚えてない。

「参ったな、電気代が上がるのだけは勘弁して欲しいんだけど。」

いや、ワンチャン消していたかもしれない。そうだ、電気は消した。消していたんだ……………と思いたい。

「今から戻って確認するか……………？いや、無駄な時間は使えないな。仕方ない、このまま行くか。」

我が家の電気代よりもこの世の明日だ。金なんぞ最悪どつかから奪えばいい話だ。ヤの職業だったらカチコミして巻き上げてても問題ないだろう。困った時はそうしよう。二課の忍者もカチコんでたし平気平気。

そんなくだらないことを考えながら走っていると、ようやく現場に着いた。まだ装者は到着しておらず沙樹が一番乗りだった。

「ッし、行くかあ。」

戦闘、開始。

w a v e 1

右手を真横に突き出して握る。そうするといつの間にか赤い筋の入った鉄棍が握られていた。

手甲越しの鉄棍の感触を確かめながら目の前のノイズに一閃。そうするだけでノイズはいとも容易く両断され塵と化した。そして駆けながら次々と薙いで行き舞う塵を増やす。

いきなり上から降ってきたノイズを掴んで真横にいたノイズに叩き込むともう片方の鉄棍で二匹を纏めて吹き飛ばした。

w a v e 2

鉄棍を両手で握って、限界まで腰を捻る。目を細めて息を吐き出しながら意識を手元に集中させると、鉄棍を中心に赤黒い霧が集まって来た。

その間にノイズが目の前を走りながら飛び掛かって来る。それらはまるで波のように押し寄せて来ており、沙樹を数で圧倒せんと覆いかぶさろうとした。

しかし、あと少しで沙樹とノイズが触れようとしたところで、鉄棍を腰に入れながらぶん回すと赤黒い暴風が辺りを支配した。

「ラァァァアッ!!」

暴風は文字通り、暴力のような風となってノイズに襲いかかり鉄棍に直撃したノイズは勿論。その余波を受けたノイズも赤黒い衝撃波によって散り散りになっていった。

ノイズの波は衝撃波によって殆どは掻き消され、ついぞと言わんばかりにコンクリートや街灯も破壊していった。

沙樹はそれを見送ると鉄棍を持つ手を下ろしてボロボロになった道路を茫然と眺めた。因みに、この時の沙樹は『道路の修復って市の税金なのか国の税金なのか』というどうでもいいことを考えていた。
「……………いや、でもこれ税金とかやばそうだよなあ。」

アニメでは気にしなかったが、こういう道路や設備の修復ってどうなってんだろうなあ。と思い耽る。予算とか色々がとんでもない金額になりそうだと、少し遠い目になっていった。

いや、それとも二課の黒服が一晩でやってくれるのだろうか。一応、忍者もいるし忍術とかでなんとかなるもののだろうか。

「てか、二課の奴ら来ねえなあ……………予定でも狂ったか?それとも俺が早すぎたかなあ?」

首を少し斜めに傾けて思案していると、もう聞き慣れたエンジンの音が鳴り響く。のっそりとその方へ向くと、いつものいかつい形相の風鳴翼がバイクで走らせていた。

そして、付近まで来ると珍しいことに特攻させずに道路の真ん中に

停めて普通に降りた。そのことに内心驚きながら沙樹は片手を挙げて声を掛けた。

「よう。遅かったじゃないか。もうノイズなら粗方殺したぞ。」

「分かっている。残りがどうであれノイズは私がやる。」

翼がそう言うが否や残ったノイズを斬っていく。加勢する必要もあんまり感じられないので、それをぼーっと眺めていると後ろから走ってくる音が聞こえて来た。

二課か一課の連中かと思って後ろを振り向くと、そこにはシンフォギアを纏った響がダッシュでこっちに駆けて来ていた。すると響もこっちに気づいたようで沙樹の目の前で止まった。

取り敢えず、片手を挙げて挨拶ぐらいはしておこうと声を掛けた。

「よう。昨日のか。」

「はっ、はいッ！立花響です！よろしくお願ひしますッ！」

「ん。よろしく。」

ここまで響に対して無口なのは、恐らく、今日の二課のミーティングの時に、俺のことも話されているだろうから無駄口を働かせないようにした。別に知らなかったら、そっちからペラペラ聞いてくれるだろうなという考えもあったとのことだ。

しかし、響はそのまま沙樹を見ているだけで動こうしない。こちらをジッと見つめているだけだ。いや、見つめているというよりも半分睨んでる、と言った方が正しいかもしれない。

「……………何？」

「……………あの、黒騎士さんが人を殺した事があるって、本当ですか？」

響のその言葉に何となく合点がいった。元々、響は性善説を信じるような人間だ。だからこそ、黒騎士という自分を助けてくれた存在が他人を害していると思いたくないのだろう。

だが、ここは正直に言おう。別に隠している訳では無いし、そうした方が第三势力的な立ち位置として見てもらえる確率が高くなるからだ。

「殺したよ。」

「ッ！なんでッ！」

「そりゃあ邪魔だから、としか言いようがないからさ。路傍に落ちてるゴミを捨てて何が悪いのか。むしろそれを教えてほしいのだけだね。」

「そんな訳ないッ！例えどんな人でも、殺すのは『じゃあ一生そう言っ
てればいい。』……………え？」

「お前にも覚えがあるだろう？2年前のライブ被害者の迫害。あんなクソ勝手な正義感や思想を持った奴のどこに容赦する必要がある？」

「そ、それは」

「だからな、俺の邪魔する奴等は全員殺す。例え、それが何であつてもだ。」

「……………」

と、ここまで偉そうに語つたが実際のところそんなに殺してる訳でも無い。カメラ片手に突撃してくるようなよっぼどの馬鹿でもない限り、取り敢えずは無視を貫く。

今まで殺してきたのといえ、ライブ被害者を迫害しようとした奴らぐらいだろう。それでも二桁になるかならないかの程度でしか殺してない。寧ろ、ノイズの方が三桁を超えるぐらい殺してる可能性もある。

因みに、カメラを持って突撃してきた馬鹿だが、あれは過去にライブ被害者の迫害を促すような動画を配信していたので、『まあ殺してくか』ぐらいの感覚でやったものだった。

と、ここで、黙っていた響が口をゆっくり開いて言葉を溢した。

「じゃあ、なんで、沙樹に手を出したんですか……………？」

「……………あ？」

その言葉が、一瞬だけ理解出来なかった。言わずもがな黒騎士の正体は沙樹である。故に自分が自分を傷付けることなどあり得ないのだが。

「……………誰だ？そいつ。」

「私の友達です。5年前、黒騎士さんが手を出した女の子です。」

「いや、マジで知らねえんだけど……………」

5年前。確かこの力に初めて目覚めた頃だった筈。そんな時に自傷した覚えもないし、強いて言うなら黒い騎士に片腹を叩き斬られたことぐらいだろう。

「了さんが言っていました。沙樹は憔悴していて、会話も辿々しかつたって!」

「いや待て本当に分かんらん。」

本当に誰だそいつは。憔悴? 辿々しい? 当時はそんな状態でも無かったと思っっているが。というより、了子の奴ホイホイと人の情報話すなよ。お前それはカウンセラーとしてどうなんだ。

ここまで考えてから、少しづつ過去の記憶が蘇ってきた。山でのゴミ拾いにノイズと黒い騎士の襲撃。その後の了子のカウンセリング。というか考えてみれば益々分からない。沙樹を傷付けたと言われることがよく分からない。

.....
いや、分かった。原因は恐らく俺だ。

あのカウンセリングの時、俺は黒い騎士のような奴が襲ってきたと奴にスケープゴートした筈だった。その結果、黒い霧を放つデカイ剣を持った俺が、ノイズやらをしばき回すようになってからはいつの間にか『黒騎士』と呼ばれたんだったか。」

あれ? 完全にこれ俺のミスじゃね? 証言で言った黒い騎士と黒騎士^俺が同一人物と考えられてる、ってコトオ!!??

「.....話が覚えてこないな。そもそも、子供に手エ出したこともねえし誰かと勘違いしてんじゃねえの?」

秘技、シラを切る。多少の身に覚えがあっても知らないって言えば大体何とかなるものなのだ。

「じゃあ、誰が、」

「知らねえつつてんだろ。犯人探したら勝手にやりな。」

少しだけ乱暴に言い放つと鉄棍を肩に担いで響から離れていく。結局、あの浮遊する騎士は出てこなかったなあ、と内心残念に思うが仕方がない。次に期待するでしょう。

そのまま歩いていけると、ノイズの残党を斬って来た翼とすれ違っ

た。沙樹には脇目も振らず響へと近づいていく。

それに気づいた響も翼に声を掛けたりするのだが、途中から言い合
いみたいになっていきらいきなり翼が響に刀を突きつけると、空高く
飛び上がって巨大な剣を顕現させて放った。

「あ、ここは原作通りなんだな」

その光景を何となく見ているが、本来、ここは弦十郎が素手で止め
て翼が響を引つ叩く筈なのだが……………。

「あれ、弦十郎のおっさん来なくね？」

弦十郎が中々来ない。そして、巨大な剣が響に当たりそうになつて

「クソがッ！」

もう考えている暇は無い。鉄棍を右手に槍投げのように構える。
すると赤黒い霧が鉄棍に収束する。

2秒歩走つて助走を。

左足を踏み込んで発射体勢に。

右手に思いつきり力を込めて。

発射。

放たれた鉄棍はどす黒い軌道を残しながら剣を穿った。鉄棍はさ
らに止まらずそのままの勢いで空をも穿った。

響は腰を抜かして、翼はこっちへと向いた。そして鋭い眼光でこち
らを睨みつけてくる。

「……………何のつもりだッ！アンノウンツ!!？」

「さすがに無抵抗の奴にオーバーキルは神経を疑う
ぞ……………いや、まあ俺が言えた事じゃねえんだけどさ。」

そこまで言ったところで今度はこちら側に剣を向ける。それに応
えるように沙樹も手を虚空へ伸ばして握る。すると今度は鉄棍では
無く、無骨な大剣が握られていた。

「邪魔をするのなら……………アンノウン、貴様も手折らせてもらおうッ
！」

「来いよ、青二才。」

f a t a l
b a t t l e